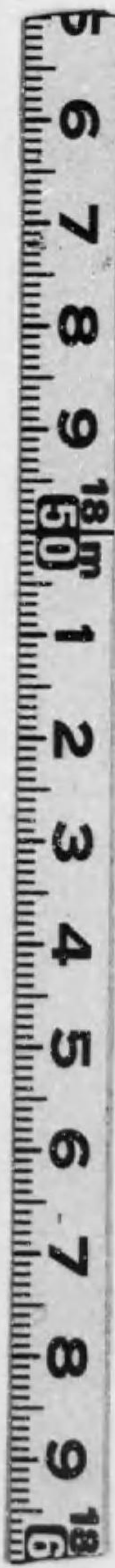


512

861



始

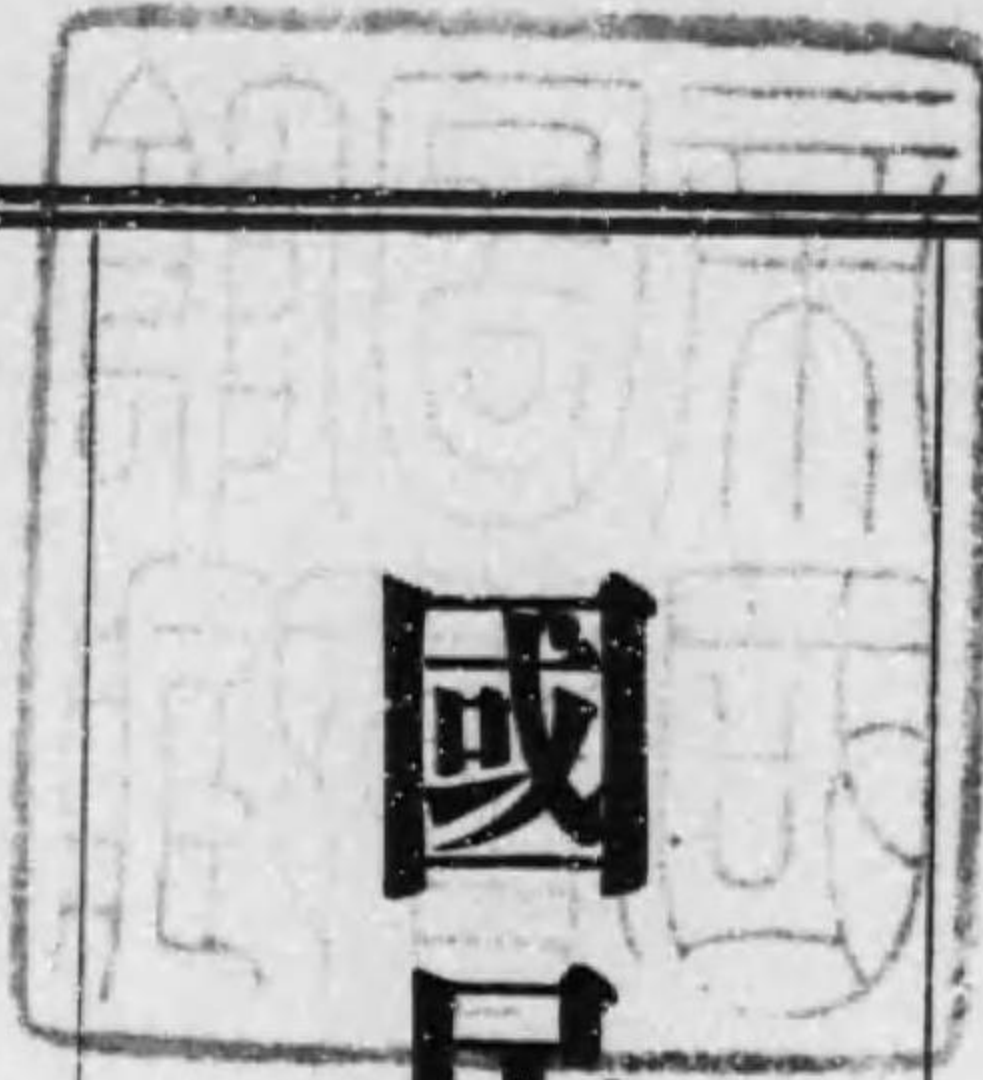


法學博士 鹽澤昌貞講述

國民經濟學原論

東京 早高堂書店發行

512-861



國民經濟學原論

法學博士 鹽澤昌貞講述

東京 早高堂書店發行

大正
15. 4. 22
丙亥

訂正増補に就て

曩に、不肖編者が淺學をも顧みず序文の如き意味に於て、この編述を物して後一年にして鹽澤先生には外遊の途に就かれ昨年五月歸朝講壇に立たるゝや、其の學說には時に新味と深淵の度を加へ、或は從來の學說に對して敷衍せられたる所あるを以て茲に訂正増補の必要を痛感し版を改めたる所以である。

訂正版中、舊版とたゞ／＼重複のきらひある箇所、例へば第一編第一章第七節と同第二章第四節の如き、舊版の講述の方詳細にして採録し置くを便利と考へ夫の儘とし、尙先生の十四年度の講義は時間の關係より第三編第七章企業にて終りを告げたるにより以下の章は舊版通りのものである事を書添へて置きたい。

大正十五年四月

編者 識す

序

鹽澤先生が今日の我が經濟學界に於て一方の權威たる地位を占めて居られることは世間周知の事實であつて、我等の祕かに思慕措く能はざる所である。殊に先生が偉大なる蘊蓄を藏しながら尙ほ研究の途上にありと稱して、一編の著書さへも出して居らぬ其の崇高なる學者的良心には轉た敬虔の念禁じ敢えぬものがあるのである。

しかしながらかうした先生の自重的態度は一面から見れば、先生の學に憬れる幾萬の書生をして頗る物足らぬ感を起させる結果を招致し、其の極せめて碩學の片鱗にても接せばやこの希望となり、ここに先生が早稻田の講壇に於ける講義は幾多謄寫版刷の小冊子とな

つて世上に流布せらるゝに至つたのである。

固より其の衝に當るものは誠心先生の眞を傳へんとするのであらうが時に誤り無きを保し難く、また其の種類の夥しき往々にして甲乙乙には叙述に相違があり、丙乙丁乙は全然見解を異にする所があるといふ弊を免れず、讀むものをして歸趨に迷はしむるは勿論我が鹽澤先生を誤解せしむるに至るので、余輩先生門下の末席を汚すものとして到底坐視するにしのびず、微才淺學をも顧みず其の一年間に於て先生より親しくきゝ得た所を編んでこゝに經濟原論一編を世に出すの妄を敢てするに至つた。固より之が爲めには成るべく誤りなきを期せんが爲め過去五ヶ年間の講義を信賴するに足る先輩の筆記によつて参照し、また疑義の在する點については親しく先生に

ついで之を質すことを怠らなかつた積りである、

最後の二編、交換論並に消費論があまりに簡単に失するが如きは講義の時間が足らざること、別に其の講座の設けあるがために先生の講義が簡單であつた爲めである。若し編中誤りあらば、そは一つに迂生の罪で先生を冒瀆すること大なるものご、其の責の大なるを痛感するものである。

大正十一年十一月

編者 識す

鹽澤博士 國民經濟學原論 目次

第一編 緒論

第一章 經濟の概念.....一

第一節 經濟の定義.....一

第二節 慾望.....三

第一款 慾望の概念及種類.....三

第一項 慾望の概念.....三

第二項 慾望の種類.....四

第三節 經濟原則.....八

第四節 經濟行爲.....一〇

目次

第五節 經濟單位……………一二

 第一項 經濟單位の意義……………一三

 第二項 經濟單位の擴張……………一四

第六節 經濟の語源……………一七

第七節 經濟と社會及倫理との關係……………一八

第八節 國民經濟の目的……………二一

第二章 經濟學と其の研究法並に他の科學との關係……………二二

 第一節 經濟學の意義……………二二

 第二節 經濟學の組織及分類……………二五

 第三節 經濟學の研究法……………二八

 第四節 經濟學と他の科學との關係……………三〇

第三章 財物……………三五

 第一節 財物の意義……………三五

 第二節 財物と自由物……………三六

 第三節 財物の範圍……………三九

 第四節 財物の種類……………四二

第四章 價値……………四六

 第一節 價値の概念……………四六

 第二節 效用……………四八

 第三節 效用漸減の法則……………五三

 第四節 價値の分類……………五六

 第五節 價値の決定要件……………六〇

第五章 經濟生活の發展……………六三

第二編 國民經濟上に於ける基礎的要件……………六三

第一章 民族及人口……………八一

第一節 民族……………八一

第二節 人口……………八五

第一款 人口研究の意義……………八五

第二款 人口の自然的配序……………八七

第三款 人口の密度……………八八

第四款 人口の増減……………九一

第三節 人口に關する學說……………九五

第一款 重商主義の人口論 附 アダム・スミス……………九六

第二款 マルサスの人口論……………九八

第三款 マルサス人口論の批難……………一〇一

第四款 新マルサス主義……………一〇五

第二章 社會及法制上の基礎的要件……………一〇八

第一節 私有財産制度……………一〇八

第二節 經濟上の自由權……………一一〇

第一款 移動の自由……………一一一

第二款 營業の自由……………一二三

第三款 競争の自由……………一二五

第四款 契約の自由……………一二九

第三節 習 慣……………一三一

第四節 權 力……………一三二

第三編 生産論

第一章 生産の概念……………一三五

第一節 生産の意義……………一三五

目次

第二節 生産の要素……………一三八

第二章 勞 働……………一四二

第一節 勞働の本質及種類……………一四二

第二節 勞働能率……………一五〇

第一款 個人的勞働能率……………一五〇

第二款 組織的勞働能率……………一五五

第三款 科學的能率增進法……………一六一

第四款 勞働教育……………一六二

第三節 勞働の供給……………一六三

第三章 土地(自然力)……………一六六

第一節 土地の意義……………一六六

第二節 土地の位置……………一六八

第三節 地 味……………一七〇

第四節 土地の利用……………一七二

第五節 報酬漸減の法則……………一七五

第四章 資 本……………一七九

第一節 資本の本質及其種類……………一七九

第二節 資本の發生と其效用……………一八七

第五章 技 術……………一九五

第六章 生産組織……………二〇一

第七章 企 業……………二〇四

第一節 企業の意義……………二〇四

第二節 企業の形式……………二〇九

第一款 個人企業……………二〇九

第二款 團體企業……………二二〇

 第一項 私的團體企業……………二二〇

 第二項 公的團體企業……………二二七

 第三節 企業合同及聯合……………二二九

 第一款 兼營……………二二九

 第二款 企業協定……………二二九

 第三款 トラスト……………二三四

第四編 分配論

第一章 分配と所得……………二二三

 第一節 分配の意義……………二二三

 第二節 所得の意義及分類……………二三八

第二章 利潤……………二四二

第一節 利潤の意義の内容……………二四二

第二節 利潤の決定……………二四六

第三節 利潤の制限……………二五〇

第三章 賃銀……………二五四

 第一節 賃銀の概念……………二五四

 第二節 賃銀の種類……………二五六

 第三節 賃銀の決定及之れに關する學說……………二六四

 第一款 賃銀の決定……………二六四

 第二款 賃銀基金說……………二六六

 第三款 勞働功程說……………二六八

 第四節 賃銀の鐵則……………二七一

第四章 地代……………二七四

第一節 地代の意義及其發生	二七四
第二節 地代に關する諸問題	二七九
第五章 利子	二八四
第一節 利子の意義	二八四
第二節 利子の起源に關する學說	二八八
第三節 利子漸落の傾向	二九一
第五編 交換論	
第一章 緒言	二九五
第二章 價格	二九七
第三章 貨幣	三〇一
第六編 消費論	三〇四

—— 目次終り ——

國民經濟學原論

法學博士 鹽澤昌貞述



第一編 緒論

第一章 經濟の概念

第一節 經濟の定義

經濟學を論ずるに當つては先づ第一に經濟とは何かといふ概念を明かにせねばならぬ。

一體經濟といふ言葉は從來二つの意味に使用せられて來た。即ち一つは學問上でいふ經濟であり、今一つは普通に餘額といふ意味で使用されて

居る經濟である。

例へば外國米を食べるのは經濟だといふやうな事は學問上に於ける經濟の意味を全然含んで居ないといへぬが大體儉約なる意味を現して居るものといつてよからう。而して是の如く經濟といふ言葉を節儉といふ意味に用ひらるゝのはひとり日本だけでは無く世界隨る所に普及して居るやうである。然し乍ら茲に取扱はうとする經濟なる言葉は勿論學問上に於けるそれである。

今この意味に於ける經濟なる語の定義を擧ぐれば、經濟とは人類がその慾望を満足させる爲に財物を取或は生産し、之を利用する行爲の關係又は秩序をいふ。

即ち人類の慾望を満足させるといふ前提の下に財物を取或は生産し利用するといふ行爲であり、然もその行爲が單一なものではなく他の行爲と聯絡し秩序を有する時に始めて經濟といひ得るのである。然らば慾望

とは何ぞ。また財物とは何ぞ。以下章を追うてこれを説明するであらう。

第二節 慾望

第一款 慾望の概念及種類

△ 第一項 慾望の概念

人類が生存するに當て第一必要條件となるものは勿論其の生命の維持であらねばならぬ。餓えたる時に食を想ひ渴したる時に水を欲し、寒さに當つて衣服の必要を感じるは皆欲望の現れであるが、吾人は單に之等衣食住のみに依りて生命を繋いでゐるてふ事のみにては満足さるるものではなく、一通り之等の必要を充足したる以上は更に各種の無形的、精神的、文化的慾望に逼らるゝは必然の理であらねばならぬ。

從て慾望を観察すれば、積極的、消極的に區別する事が出来る。

積極的に云へば慾望は人類の經濟發展に對する必要の感覺であり、消極

的に云へば、之れに對する不足の感覺である。

故に之を本質的に見れば心理現象であり、從て遂次的變化的であり、然も常に社會文明の進歩發展に從て其の種類も増加し内容も精化(向上)しつつあるのである。

以上述べ來つた慾望の概念は其の外物利用に對する輕重厚薄により價値の問題を考察するに當て根本的に必要な概念となり、從て經濟關係の意味を生ずるのである。

第二項 慾望の種類

慾望は人類の必要觀念と不足觀念とを併せていふものとすれば、人により所により時によりて其の種類を異にすることあるは自然の數といはねばならぬ。今之に關する各種の分類を擧ぐればザツト次の如くならうか、

一、外部的慾望 (External Want) 經濟的慾望

一、内部的慾望 (Internal Want) 非經濟的慾望

外部的慾望とは外界の事物によつて満足し得るもの、例へば衣食住の慾

望の如きものをいひ、内部的慾望とは無形物、即ち精神によつて満足されるもの、例へば他人の尊敬を受けるか、政治上の權力又は支配慾を得るか、いふことを云ふのであるが、この分類にはいささか首肯し難い點がないでもない。何となれば所謂精神的慾望なるものは必ずしも無形の物のみにて満足されるもので無く、時に外界の事物を必要とする場合が少くないからである。彼の教育に當つて學校を要し、宗教に寺院を要するが如きこれである。

また第二の分類には、

一、生存慾望 (Existence Want)

二、文化慾望 (Civilizational Want)

といふのである。

蓋し人類は何をさし置いても先づ生存して行かねばならぬ。而してこれが爲めには衣食住といふやうな所謂生活必需品を獲なければならぬ。

この種の慾望も生存慾望といふのである。今人類が何等かの手段によつてこの種の慾望を満足せしめ得たとすれば續いて起るのはより高度の慾望である。即ちこれ無くとも格別生存に支障は無いが、人間として生存するからにはかくありたいといふ程度のもので、極く卑近な所でいへば食物には美味を欲し、衣服には絹物を、住居には成るべく高雅で設備の整つたものを要求するといふのがそれである。而してかゝる慾望こそ第二項の文化慾望に相當するのである。

第三の分類は、

一、自然的慾望 (Necessary Want) (必要的慾望)

二、分限的慾望 (Doceatial Want)

三、奢侈慾望 (Luxurious Want)

である。自然的慾望又は必要的慾望は何人にとつても生存上缺く可らざるものであつて前述の生存的慾望と類を同うする。

また分限的慾望とは其の人の身分に應じて起るもので學生の制服制帽とか、上流社會の自動車、馬車等を要求するが如きこれである。第三の奢侈的慾望とは生存上に於ても、將たまた身分上に於ても格別必要はないが、これあるによつて、人生の趣味を満足せしめ、生活の向上を計り得るといふものであつて、書畫骨董に對する慾望の如きがそれである。

是の如く數へ擧ぐれば、なほ幾多の分類を生せねば己まぬのであるが、要するに觀察點を異にする爲めに外ならぬのであつて、今日生存に必要な慾望も或は時代の進歩と共に必要で無くなるかも知れず、昨は奢侈慾望と稱せられたものも今日は必要的慾望にならぬとも限らぬ。

唯だ吾人がその間を一貫して握り得る一個の事實は人類のあらゆる限り慾望は多々益々その種類を増しこそすれ決して絶ゆるもので無いといふ事である。

かくして人間はその數へ切れぬ慾望を満足せしむべく身心を活動させ

るといふ段取となるのであるが、經濟は實にこの活動の一種で、財物を生産利用するといふ行爲に附せられた名稱に外ならぬ。

第三節 經濟原則

經濟原則を論ずるに當つて吾人は先づ慾望の満足に就き一言して置かねばならぬ。

凡そ人類生存發展の必要を満さんが爲めには、其の慾望満足の方便たる財物を獲得する努力を必要とするのであつて、その内容から云ふ時は苦痛若しくは犠牲の觀念を含むものであつて、即ち茲に勞動を生ずるのである。言葉を換へて云ふならば財物を生産利用するといふ行爲によつて慾望を満足するには大なり小なり勞働の苦痛を味はねばならぬのである。何んとなれば、慾望満足の對照たる財物は有限の原則 (principle of scarcity)

に従ふが故に之を獲得するには或る種の準備を必要とし、慾望の調節^{按排}將來に對する念慮等の努力が内容として含まれてゐるからである。

然るに凡そ生物が勞を厭ふのは普通の原則とするのであるから經濟的行爲も亦この原則の適用を受けることとなる。即ちこれが當然の歸結として慾望は満足させたいが出来るだけ少い勞力でやつて見たいといふ念を生ずるのである。

も少し判り易くいふならば勞は成るべく少なるを要し、これによつて舉る效果は成るべく大なるを要すといふ極めて虫の好いことなのである。今之を分析して見ると

一、儉約の原則 (Principle of Saving)

二、最大の原則 (Principle of Maximum)

この二部分に分たれるのであつて、これを經濟原則とはいふのである。尤もこの原則は必ずしも經濟行爲ばかりを支配するものではなく、又人間の

行爲のみが當嵌められるのでは無く、水は常に低きに向つて流れ、火は乾けるものに燃ゆる等、宇宙間の森羅萬象盡くがこの原則によつて動いて居るのであり、また同じく人間の行爲であつても、雨天の際にヌカルミを避けて歩くように、何れもこの原則の適用を見て居るのであるが、就中經濟行爲に於てその顯著なるを見るのでかくは名稱けられたのである。

第四節 經濟行爲

是の如く慾望を満足せしめんが爲め最少の努力を以て最大の効果を擧げるように財物を生産利用する行爲、即ち經濟行爲は細別すれば、

第一次は、生産的働きでなければならぬ。

第二次は、消費的働きでなければならぬ。

この二者の働きを稱して經濟的行爲といふのである。然らばこの經濟的行爲たるや如何なる動機によつて發生するのであるかといふに、英國の學

者ジョン・スチュアート・ミルは經濟人(Economic Man)なるものを想像して、人は皆利己心を有するもので、これによつてのみ經濟行爲は起ると説明してゐるが、この説は次に述ぶるやうに人は利他心からも經濟行爲を生じ得るのであるから、少し言ひ過ぎた觀がある。乍併その主なる動機が利己心にあるはいふまでもないことで、吾人は經濟行爲の動機として先づ利己心を數える必要がある。即ち、

一、自己本位の動機

である、而して更にこれを分類すれば、

(イ) 積極的動機

(ロ) 消極的動機

となるのであつて、前者は進んで自己の利益を得んとする場合、後者は自己の窮迫を恐れて之を防がんとする場合である。然し乍ら經濟行爲は必ず

しも利己的の動機からばかりではなく其他、

二、利他的(博愛)の動機

即ち世の爲め人の爲めに努力するといふが如き場合、

三、責任觀念

四、義務觀念

等の動機からも出發してゐる事が多い。

尤もかのアダム・スミスが説いた自利心は今日使用せられて居るやうな狭義のものではなく、自利心を徹底的に押し進むれば結局愛他心と一致するもので、眞に自己を利せんとするには他をも愛し利せしむる必要があるといふにあるので、若しこの意味からするならば、經濟行爲は自己本位の動機のみから出發するといつても敢て不可は無い。

第五節 經濟單位

第一項 經濟單位の意義

吾人は前節に於て經濟行爲によつて生ずる動機を説いた。然らば經濟行爲なるものは、或單獨の人が孤立して爲し得るかといふに、原始蒙昧の時代と雖も既に經濟行爲なるものゝ發生を見たからには、そこに共同動作の存在、即ち社會的關係に於ける統一せられたる組織てふ事を否定し得ない。ロビンソン・クルソーは無人の孤島に生活したといはれてゐるが、これとても決して獨立的生活を完成したものといふことは出来ない。なんとなれば其孤立生活に入る前既に彼はあらゆる社會的交渉を有して居たからである。彼が魚を漁つたのも船を造つたのも皆彼が孤島生活に入る前に習得したものである。

翻つて吾等の生活を見よ、吾人の日常着用して居る衣服も實に幾千年幾萬年の間に於ける幾億萬の共同的動作によつて成つたものといはねばならぬ。また暫くかかる時の觀念を離れて見ても、吾人の今日着用して居る

木綿について一個の考察を下して見るならば、其の原料の棉花はアメリカインド、若くは支那の農夫の手に成つたもので、その棉花から絲を紡出す爲めに使用した機械はイギリス人若しくはアメリカ人によつて造られたものであつて、これが影響の及ぶ所極めて廣きを覺ゆるのである。

かくの如く經濟行爲は社會的に組織聯絡があるのであるが、さてこの經濟行爲及びこれが及ぶ影響の範圍に至つては所を異にし、時代を異にするに従つて自ら廣狹の別あるを免れない。

所謂經濟單位といふはこの範圍を指すのである。尤も經濟單位なる言葉は必ずしもこの意味で許りに使用されて居るものではなく、經濟的活動殊に生産行爲をする經濟の主體、即ち或る個人(法人も含む)を指す場合もあるが經濟學上に於ては前に述べた經濟共同生活の一團體の範圍即ち集合體の經濟的活動を一單位と見るのを普通とする。

第二項 經濟單位の擴張

前述の如く經濟行爲は畢竟する所一個の共同動作であり、其の基本となる集合體は一の經濟單位を形成するのであるが、人類の共同生活の範圍は文明の進化と共に發展擴張するものであつて、昔は家族を以て一個の經濟單位となした。即ち其の程度は低いが夫自身で經濟行爲を遂行することが出来たのである。

尤も古の家族は今日の如く夫婦を基礎とする小家族では無く、尨然たる大團體であつたといふことを記憶して置く必要がある。

而してこの家族經濟は聽て部落或は村落經濟、都會經濟となり、次いで國民經濟となり、今や國際經濟に入らんとしてゐるのである。更に進めば世界經濟に入るのであるが今はその域に達しては居ないのである。で今日は如何なる時期に相當するかといへば無論國民經濟の時代で、即ち國民共通の經濟を單位として想像したものである。

ここに一應注意して置かねばならぬのは國民經濟と私經濟、國民經濟と

國家經濟との區別である。

國民經濟は前述の如く國民共通の經濟を一個の單位として想像した抽象的なものであるが、私經濟即ち或る一家族の家庭經濟であるとか、或る商店或る會社の經濟であるとかいふものは具體的に存在して居る。又國家經濟即ち財政なるものは國家が其の慾望を満足せしめようとして、換言すれば國家が其の維持發展を計らんがために財物を集めこれを利用する行為をいふので、廣狹の相違こそあれ前記の私經濟と同じく具體的に存在するもので、國民經濟とは異なる。

かの仁徳天皇の御製

高き家に上りて見れば煙立つ
高き家に上りて見れば煙立つ
高き家に上りて見れば煙立つ

民の窠は賑ひにけり

にある民の窠は國民經濟を示せるもので、天皇は國家經濟より國民經濟の發展を喜ばせられたるもので、また國家經濟は國民經濟の發展あつて始め

て全きことをよく知らしめたのである。

これから講述しようとする經濟學は實にこの國民經濟の問題を取扱はんとするに外ならぬ。

第六節 經濟の語源

邦語にて經濟といふのは所謂支那から傳つた經國濟民の中の二字を採つたもので、その本來の意義は社會上に於ける物質的發達を促して一般民衆の福祉を増進せんとするにあるのであるから、稍々その意味を異にするのであるが、目下我國で經濟といはるるのは英語のエコノミー(economy)を翻譯したものに外ならぬ。而して英語のエコノミー(economy)はまた其の源をギリシヤ語に發して居るのであつて、ギリシヤ語の家といふ語であつた。家の暮しを意味したものである。

亦支那に修身齊家治國平天下なる語があるが、これは仲々味ふべき言葉

であると思ふ。齊家は即ちギリシヤの家政に該當してをり、この家政が近世の初期には治國の形となり、英語のポリチカル・エコノミー (Political economy) がそれである。

元來このポリチカル・エコノミーなる語は政治の一部を指したものであるが、轉じ來つて今日の經濟の意義を表す語となつたものである。これが平天下まで擴張される様になると世界經濟の意味を成すことになるが、ただその域には達してをらぬ。

第七節 經濟と社會及倫理との關係

そも／＼經濟とは人類が慾望満足の目的を以つて財物を生産利用する行爲の關係亦是秩序である事は前述せる所であるが、然らば人類が社會生活をなす上に於て、無限の慾望に對して有限の財物を利用せんとするにはそこに道德的、倫理的調節の必要あるは勿論のことである。

然しながら昔時に於てはこの明白なる觀念を無視して經濟と倫理とは相容れざるが如く論せられてをつたのである。

例へばギリシヤのアリストートルの如きは、營利といふ事を非常に卑み、營利を目的とする行爲たる商賣を排すべしと論じ、東洋に於てもその思想甚だしく、農工商中、商業を以て「未利を追ふの業」とし、孟子の如きも、「何ぞ必ずしも利を言はん、仁義あるのみ」といつてゐる。

然しかかる觀察も攷細に點檢し來れば、單なる一部分の現象を見て全體を判斷せんとするにござまるもので、斷じて本質的研究考察に基けるものとは言ひ難く、即ちこれを根本的、本質的に觀察を下せば、經濟とは人類生存發達の手段であり、換言すれば人類社會の維持發展の爲めに財物を取利用する事であるが故に經濟は全然一つの統一的社會的行爲で、社會の觀念を離れては存在しないのである。従つて社會の完全なる存在はその成員の完全なる調和によつて期待され得るのであるから、經濟行爲の結局の目

的は倫理と其の目標を同一にし、兩者は相一致するものである。この兩者を調節せしめてこそ完全なる進歩發達を期し得るものではあるまゝか。經濟の根底に道德無く、道德の存する處に經濟的基礎なくんば如何にして社會生活の完成を期し得ようか。「衣食足りて禮節を知る」といふことはよくその理を物語つてゐる。

プラトンの理想國中の貧富論中に「最も貧せるものは何事も出來ず、最も富めるものは、不正の手段で富んだのであるから何れも不可である。中位の處をよしとする。」といつてゐる。

又一國の産業の發達が道德的基礎無くして可能なりや否やは、これを比較論より見ても、經濟的に堅實なる國は經濟行爲そのものが道德化してをる。例へば英國の如きは最もその信用を重んじ、道德的營業に重きを置き、之れに反して單に一時的に不道德なる儲を希ひ、道德的基礎の乏しき國には進歩した經濟を見ないのであるから道德的文化と經濟的文化とは相調

節して行かなければ完全なる進歩發達は到底望み得られないのであると思ふ。

第八節 國民經濟の目的

國民經濟の目的を一言にして盡せば、人類の福祉、人類の圓滿なる發達を期するにある。換言すれば、人類の完成を目的とするのである。然らば如何にせば完成を期し得るかといふに、一國內に於ける國民がその慾望を益々向上増進し、同時に之を満足せしむべき資料を増加し、而して出來得る丈、各人間に正當に配劑整理せしむべき方針を取る事が國民經濟の目的である。

第二章 經濟學と其の研究法並に 他の科學との關係

第一節 經濟學の意義

經濟學とは何ぞやといへば、吾人は直ちにそれは人間の經濟について研究する學問であると答へたい。

從來この定義について古典學派の經濟學者ジョン・ステアード・ミル等の如きは經濟學を財物の方面から論じて、經濟學とは財物について研究する學問であるとか、或は財物の生産、交換、分配等に就いて研究する學問であるとの定義を與へた。勿論此の定義は全然誤謬であるといふことは出來ない。何となればこれを主體から見ても客體から見ても、財物を外にし慾望満足といふ中心思想を外にして經濟を論じ得ないからである。ただ觀察

點を慾望の對象たる財物に置くのと、その主體たる人に置くのとでは後者がより合理的である許りで無く財物を主とする時は、動もすれば真相を誤り易い缺點があるので、吾人は人を本位とすることの適當なるを思ふのである。

さて吾人は更に進んで經濟學の本質を述べねばならぬのであるが、その以前に經濟學が科學であるか否かを明かにする必要がある。

何故に是の如き疑問を生ずるかといふに、經濟學に於て論ずる内容は甚だ漠然たるものがあり、果して其間一般的法則の存在するあつて諸種の現象を支配するものなりやが不明であるからである。

換言すれば多くの經濟現象は偶發的に起るものであるとの疑を生じ易いのである。彼の自然科學に於けるが如く、酸素と水素とを合すれば水となるといふやうな明確な歸結は經濟學に於て見出すことは難く、理論と實際とは動もすれば齟齬せんとする傾向を有して居るのである。

故に經濟學の説明する内容を一定の法則で律し得ないといふことになり、ここに科學としての存在を失ふこととなるのである。然しながらこの疑問は他の自然科學に比較することから生ずるのであつて、自然科學に於ては前述の如く一定の現象を一個の法則によつて正確に説明することが出来る。また一定の法則によつて種々の現象の起つて居ることを知るのである。然しながら經濟上の諸現象は所謂社會人事に關するもので、他の自然科學に於けるが如く一定の法則に支配せられて居ることを確かめることが出来ない。蓋し人事は人間の心理作用がこれに働きかけて居るのであるから容易に捕捉し難いのである。

然しながら翻つて思ふに社會上の現象も經濟上の現象も動かすべからざる因果關係によつて支配せられて居るのを見るし、又これによつて説明することが出来るのである。

例へば需要供給の關係の如きはこれで、供給の少い時需要の多い時に物

の價値は貴く、供給の多く需要の少い時には價値の低いといふ現象も漫然これを觀察する時には偶發的事項の如く思はるのであるが、焉ぞ知らん確定不磨の大法則によつて支配されて居るのである。ただ法則によつて説明し得る程度が自然科學の如く明確でないだけの話である。故に經濟上の現象もある法則によつて支配せられるもので、これを標準として一の科學を組織することは決して不可能ではない。

第二節 經濟學の組織及分類

經濟學の一般組織について今日普通用ひらるゝ分類法は二分説と三分説とである。而して三分説が最も多く採用せられて居る。

三分説とは經濟學を分つて、

一 一般經濟學或は理論經濟學

二 特別經濟學或は應用經濟學

三、財政學、

の三つに區分するのであつて第一項の一般經濟學若くは理論經濟學とは理論的に經濟學を研究するもので、經濟全般に渡るもの所謂經濟原論がこれである。

第二項の特別經濟或は應用經濟とは、特別の問題を中心として、これを應用的に研究するもので、例へば農業、商業、工業、交通、林業、鑛山、水産、救貧、人口、保險、殖民等の問題を實際的に研究するものである。而して是れは主として國家的見地から如何に産業を研究するかといふ場合が多いからまた政策ともいふのである。

第三の財政學は國家若しくは其他の公共團體の經濟に關して研究する學科である。即ち公共團體特に國家なる團體がその生存發達を計る上に如何なる入費を要し、又如何なる方法を以てその財源を得るかを研究する學科である。故に嚴格な意味からすれば、性質上應用經濟に屬し、寧ろ第二

部に編入せらるべきものであるが、國家の經濟はその範圍が大きいのでその必要の程度が高いのとでかくは分類するのである。

この三分説は主としてドイツの學者によつて唱道せられたものであるが、英國にも其思想はないとは言へず、アダムスミスの如きは、それ程明確には主張しなかつたものゝ、充分その意向を有したもののゝやうである。

次に二分説とは經濟學を

一、純正經濟學、

二、應用經濟學、

とに分つもので、理論と應用とによつて區別したものである。これについても英國にはそんな明白な區別はなく、經濟學といへば主として原論のみを云ひ、應用はその分派として見て居るに過ぎない。

また學者によつては

二、公經濟(財政學)

二、私經濟、公經濟以外の一切

に分つものもあるが、この區別は必要適切なものとはいひ難い。

第三節 經濟學の研究法

經濟學の研究にも他の科學の研究と同じく演繹的研究法と歸納的研究法とを合せ用ひなければならぬのは勿論であるが、經濟學では自然科學のやうに直接實驗を試るといふ事は容易な業では無い。従つて經濟上の現象を他の現象から引離して抽象的考察を下し、人間は自利心を有するものであるといふ事實を前提としてこれが研究に當るといふことは誠に已むを得ない所といはねばならぬといへ、經濟學の研究は決して演繹的研究だけに止るものでは無く、時々刻々に變化する經濟上の事實に關し、種々の現象を集め、これが裏面に存在する法則を發見し、これを綜合統一する歸納的研究にも充分つとめなければならぬのである。何となれば元來經濟

行爲の基調を爲して居る慾望は主觀的のものであるから、或程度までに演繹的研究を許容するも個々の慾望の發露になる數多の經濟現象は極めて動的であつて變動常なきが故に、寧ろその結果たる現象の方面から研究することの有利なる場合が多く發見されるからである。かの統計的研究法の如きも歸納的研究の有力なるもので、推理の正確を期する上に於て缺く可からざるものである。

經濟學上に種々の學派があるのも實に右の研究法と種々の意味に於て密接なる關係を有するもので、英國の古典學派(ミル、マルサス等は演繹法を主とし、最近にあつては米國のフイツシャー教授はこの部類に屬する)之に對して起つたドイツの史學派(シモラー教授等は歸納的研究法を主張し、歴史的に事實を集めて研究せなければならぬ)と力説した。又前兩者に對して奧太利學派なるものがある(カールメンガー、ペーンバツエルグ等)。演繹的研究法を採つてはゐるが、古典派よりは一步を進めた觀がある。現在の

獨逸學者は多く(ワグナー)等折衷說で、系統はやゝ史學派に近いが極端に走らないのである。

要するにこれ等の學派は皆その研究法を異にする所から生ずるもので、その何れを可とするかに至つては問題によつて區別せなければならぬ。即ち價值論の如きは人間の慾望といふ主觀的事實から出發するものであるから、勿論演繹的研究を可とするも、生産論、分配論の如きは歸納的研究殊に統計的調査を必要とするのである。國勢調査の必要を感ずる所以である。

第四節 經濟學と他の科學との關係

經濟學が既に科學である以上、如何なる科學に屬すべきやといふに、科學を大別して自然科學と社會科學の二つに區分する事が出来るが故に、經濟

生活が社會生活の一部分であり、従つて社會全體の變化に伴つて變遷する所より社會科學に入るべきである。

經濟學が社會科學の一部である以上、他の諸社會科學と如何なる關係を有して居るものであらうか、次に簡單に述べて見る。

一、社會學との關係

既に述べたるが如く經濟行爲は其の主體を人に於て見出すものであり、經濟は一種の人事關係であるといはねばならぬ。従つて經濟學が人間の社會生活を研究する社會學と密接な關係を有するは勿論、廣義にいへば經濟學も社會學の一種であるといへるのである。

二、心理學との關係

經濟學の研究對象は人間の慾望である。而して人間の慾望は心理的のものであるから、この研究に際しては勢ひ心理學の力を假らねばならぬ譯である。

三、倫理學との關係

既に經濟行爲と倫理行爲との關係は稍詳しく述べてをいた通りであるが、嚴正な意味からいへば、社會狀態は之を倫理狀態であるといふことが出来る。何んとなれば、人類が社會を爲すに當り、即ちそこに共同生活の存在する限り、各人の行爲を制約する爲めに倫理の存在を否定し得ないからである。否寧ろ社會生活は倫理生活なりと斷じた方が當つて居るかも知れぬ。

かくて經濟生活も社會生活、共同生活の一種であるから、經濟學が倫理學と離る可らざる關係を有するは勿論である。

四、法理學との關係

社會生活が見様によつて倫理生活と解釋し得るは前述の如くであるが、社會生活の秩序はまた法制によつて定められ維持支配されて居る。従つて法制と經濟との關係は離る可らざるもので、例へば彼の私有財産制

度の如きもこれが廢止を見たとすれば、これを前提とする現代の經濟生活は餘程變化せねばならぬものであらう。

尤もこれは觀方によつて經濟生活先づ變化して然る後に法制の變革を見るともいへるのであるが、それにしても經濟と法制とは密接な關係を有つて居るものといはねばならぬのであるから、經濟學と法理學とはその關係頗る密なるものがあるのである。

五、政治學との關係

政治上の事實は盡く經濟に其の本を發して居るのであるから、經濟學の研究に當つて政治學を離し得ざるは申すまでも無い。

六、歴史學との關係

經濟學派に史學派なるものゝ發生を見て居る事實が、最も雄辯に歴史學の經濟學研究に缺く可らざるを物語つて居る。

七、統計學との關係

經濟は事實を基礎とするものであるから、これを全然無視して經濟學を研究し得るもので無い。現に學者によつては、統計學を經濟の部に加へて居るものもある位であつて、經濟學と統計學の關係や深しといはねばならぬ。

第三章 財物 (Economic Goods)

① 第一節 財物の意義

既に述べたるが如く、經濟とは人間が其の慾望を充足せしむるために財物を生産利用する行爲の關係をいふものとすれば、財物なるものこそ經濟を構成する一大要素であるといふべく、従つて經濟學上に於ても最も重要視せらるる點である。

吾人は財物の意義を論ずる前に財物なる語につき述べんに、學者によつては economic goods を「財」又は「財貨」と稱するも、吾人は

- 一、自由物に對して、
 - 二、其の本質上、有形物に限らるる
- が故に「物」なる語を添へて「財物」と稱するのである。

然らば財物とは何か、財物の本質は如何。唯漫然と考察を下して見ると吾人の慾望を満足せしむるに足る物であつて、人間以外に屬するものは盡く財物といつて不可が無いやうであるが、然しながら實際はそんなに簡単に解決し去ることは出来ない。

例へば空氣の如きは吾人の生活に缺くことの出来ぬもので、長くも三十分間これを絶つならば吾人は生存不能の状態に陥るの餘儀なきに至るのだが、誰もこれを財物だといはぬのである。また大洋の水、湖沼の水、太陽の光線等も同様の意味で財物とはいはぬのである。

茲に於てか財物と稱へ得るものには一定の制限の存するを知るのである。

第二節 財物と自由物

吾人は人間の慾望を満足せしむるもの必ずしも財物ではないと述べた。

然らば經濟學上に於て之等の物を如何に區別するかといふに大體に於て自由物と財物とに分つのである。而してこの區分は供給の點から觀察されたもので、如何程それが人類の爲めに有用なものであつてもその供給が無限であつて、これを得る爲めに吾人が何等の努力を要することなく、換言すれば經濟行爲を必要とせないものは財物とはいはれずに自由物と稱せられて居る。

前節に述べた空氣であるとか、大洋の水であるとか、太陽の光線であるとかはこの範圍に屬する。然しながら單に供給に制限があるばかりでは直に財物とはいへぬのであつて、彼の月や太陽の如き地球上から見ると唯だ一つしか無いのであるから供給には制限があるといつて不可は無いのであるが、さて吾人が之を得やうとして如何に努力を拂つて見た所が及びもつかぬ話である。換言すれば吾人の到底所有することの出来ぬものであり、吾人の經濟行爲の對象となり得ぬものである。故にこの種のももの財

物とはいはれぬのである。然らば財物とは如何なるものであるかといふに、

- 一、人間の慾望を満足せしめ得るもの、即ち效用があつて
 - 二、供給に制限があり、従つて勞力を要し
 - 三、吾人の所有することの出来るもの
 - 四、交換性を具へてゐるもの
- をいふのである。

以上吾人は極めて簡單に自由物と財物との相違を述べたが、右の如き次第であるからといつて自由物と財物との限界は瞭りついでをるのでは無い。

茲に注意すべき事は自由物と財物の關係である。兩者は以上學げたる條件により抽象的區別はなし得るも、具體的區別に至つては不可能なる場合が多いのである。

成る程空氣の如きは到る所に存在して居つて、吾人のとるに任せて居るから自由物といつて不可は無いが、これが壓搾空氣として醫術、理化學等に使用せらるる時には決して自由物とはいへなくなる。また同じく普通の空氣であつても潜水夫が海底に潜つた時に送る空氣の如きは立派な財物となつて居る。これは水に就いてもいへることで、今日の觀念では井戸の水は殆んど自由物であるが、旱魃に際すれば忽ち財物と變ずるし、水道の水に至つては常に財物である。かくの如く同一のもの必ずしも自由物若しくは財物であり得ないので、其の限界は甚だ不明であるが、要するに吾人の經濟行爲に關する對象たり得るものを財物として大した誤はないようである。

第三節 財物の範圍

吾人は前節に於て效用を有し供給に制限があり且つ所有し交換をなし

得る外界の物は總て財物であると述べた。而しながらここに問題となるは無形物をも財物と稱すべきかといふことである。

例へば(一)人の健康、知識、能力等の人間に屬する内的物件(二)專賣特許權、實用新案特許權等の諸種の權利(三)勞働力等をも財の一種といつて差支へないかといふのであるが、第一に人間に屬する内的物件を財といふのは既に人間を經濟の主體と認むる以上甚だ矛盾した話で、人間を構成して居る要素と人間とを全然別離して考へるといふことは到底不可能である。従つて之等の内的物件は財物と認めないのが至當であらう。

次に專賣特許權のやうな、或る種の權利は所有する事も出來又賣却することも出來る。故にこの點から見ると財物といつても誤つて居ないやうである。そしてまた經濟學者の中でも之等の權利を財物と認めて居るものが多い。けれどもよく考へて見れば權利は夫自身が獨立して存在するものでは無い。獨立して或る價值を有して居るものでは無い。或る他の

有形物を豫想して始めて存在なり價值なりを認め得るのである。従つてこの豫想物が無ければ何等の價值を有するものでは無い。彼の造作賣貸家などといふものに在る造作は一種の權利ではあるが、あれは家といふ財物と切離しては到底考へ得られぬものである。故にこれも財物とはいはれない。

第三に勞働はごうであるか、今日のところでは雇主が勞働者を雇ふのはその勞働力を利用して自己の欲する生産を爲すにあるのであつて、事實上に於て勞働者の勞働力なるものは買はれて居るのである。この意味から一般に勞働を財物と見て居るやうであるが、これも先に權利の場合に述べたと同じく人間の活動は人間夫自身に屬するものである。而して人間は經濟の主體であるから、勞働も經濟を支配する地位に置くを至當とするのである。又勞力からいつても、これは單に財物を得る手段に過ぎない。

彼のバリー講和會議の際に於ける國際勞働會議の規約第一條に於て、

人間の勞働は權利に於ても事實に於ても商品と見做すべからず。この原則を定めたのは實にこの點に胚胎して居るものであつて、最近勞働問題の漸次擡頭して來たのも出發點はこゝに存するのである。故に勞働も財物とはいはれない。

以上述べた所を綜合して見ると、財物とはどの範圍までいふかといふことが更に局限されて來る。重複を顧みず更に財物とは何ぞやとの定義を擧げて見る。

財物とは人間の慾望を充し得る有形物で而も供給に制限があり且つ所有し、交換し得るものである。

而してこの財物の範圍は時代を異にするに従つて各國の經濟學者から種々に區別せられて居つた。即ち英國のクラシカルスクールは財物を有形物に限り、後獨逸の學者はその範圍を廣くするを適當なりとして無形物をも包含せしめたが、更に最近では有形物に限るやうになつて來た。然し

ながら最近の有形物説はクラシカルスクール時代の有形物説とはその精神を異にして居るのであつて、古代に在つては物を主として見た關係から有形物にのみ限つたのであるが、今日では上述のやうな理由で有形物を採るのである。

第四節 財物の種類

財物の分類は各その見地を異にするによつて相違がある。第一に直接財物と間接財物とに分つことが出来る。

直接財物とは人間の慾望を直接に満足せしめ得るもので、また之を消費財物ともいふ。吾人の日常生活品と稱するもの被服、食物の如き皆この部に屬する。

また間接財物とは直接に人間の慾望を満足せしめ得るものではないが、これによつて直接財物を生産することの出来るものをいひ、一には生産財

物ともいふ、紡績會社の機械の如きはその一例である。

然しながらこの區別は絶対的のものでは無く、人により場合によつて同一の財物が消費財物であることも生産財物であることもある。

例へば工場主がその家族を扶養せんが爲めに消費する米は直接であり純粹な消費財物であるが、これを雇人の賃銀の一部として支給するときは立派な生産財物即ち間接財物である。

次に同じく消費財物にしても自らそこに區分があり、學者は消耗品と消費品とに分けて居る。即ち食物の如く唯だ一回の消費によつて失つてしまふものは消耗品であり、衣服の如く何回かの消費に堪え得るものは消費品であるといふのである。今これ等の關係を表解すれば、

財物
 直接財物(消費財物) 消耗品
 間接財物(生産財物) 消費品

第二に享樂財物と必要財物との區別もある。必要財物とは人間生活の

上に缺く可からざるもの、例へば米、麥、鹽、住居等の如きもので、享樂財物とはこれ無くとも人間生活は送り得ないでは無いが、あれば一層その生活をして趣味あらしむるものをいふのであつて、酒、煙草の如きものから繪畫、彫刻の如きものがこれに屬する。

尤もこの區別も絶対的のものでは無く、時により所により人によつて同一の財物であつても、或は必要財たり或は享樂財たることのあるのは勿論である。

第三に學者によつては第一次品、第二次品、第三次品なる區別を下してあるものもある。これは人間の慾望充足の距離から見たもので最も近いものを第一次となし、漸次遠きに及んで居る。

例へばパンは第一次品であり、之が原料たるパン粉は第二次品であり、その原料たる麥は第三次品と爲すが如きである、其他尙幾多の分類法があるけれども、要するに人間の慾望を中心として觀察したものに過ぎない。

第四章 價 値

第一節 價値の概念

既に述べたるが如く經濟とは人間がその慾望を満足させる爲めに財物を生産利用する行爲の關係をいふのである。

換言すれば人といふ主體と財物といふ客體との間に起る關係をいふのである。而してこの兩者の間に於ける連鎖となるものは即ち價値の概念である。故に價値は心理的の現象であつて、人類の慾望満足に對する財物の重要なことの認識である。換言すれば財物の效用の認識である。而して認識の根本が感情と判断とである事はここにいふまでもない。今これ等の關係を具體的に説明すれば、ここに一個の帽子がある。この價値如何といふはこれに對する一種の認識である。即ちこの帽子が人間

△

の慾望満足に對して或種の重要さを有して居るといふことである。人間にとつて役に立つといふことである。

更にまたここに二個の帽子を提供せんか、それが上等のものゝ下等のものゝであれば、人は必ず上等のものを選び、若しそれが同種のものであれば各自の好みに應じて選擇するであらう。これ人の財物に對する認識の程度を異にするからで、以て價値の主觀的作用なるを知るに足る。

またここにある私のノートの價値如何といふに、これは諸君にとつては殆ど無價値の反古紙同様のものであらうが、私にとつては千萬金に換え難い尊いものである。

然しながら經濟學上では今述べたやうな主觀作用に基く價値、即ち主觀的價値の外に交換價値といふものを認めて居る。

交換價値とは交換する點から價値を生じてくるもので、例へばここへ人あり、一個の時計さへ持てば足るものが十個の時計を持つたとすれば残り

九個は殆んど無用のものであるから價值はそれだけ低下すべき筈であるが、實際はさうでないといふのは、残りの九個を以て他の自己に有用なものと交換し得るからで、今日の意味から言へば貨幣に換えることが出来るからであるが、而しこの交換價值なるものも詮じ詰むれば主觀的價值に基いて居るもので、價值が效用の認識であることには聊かも變りは無い。茲に於て吾人は先づ效用とは何ぞやといふことを極めなければならぬ。

第二節 效用⁴

吾人は前節に於て價值とは慾望満足に對する財物の重要さの認識であると述べた。

然らば慾望満足に對して重要であるとは如何なる意味であらうか。それは實に慾望を満足せしむる力を有して居るといふに外ならぬ。即ち效用を有して居るといふことである。

故にこれを效用の方から言へば、效用は人間の慾望を満足せしむる能力 (Capacity) であるといへるのである。

ところでこゝに問題となるは財物の慾望を満足せしむる能力は財物それ自身にのみあるものと見ることが出来るかといふことである。このテーブルは此處にあらうが、大洋の底にあらうが、將た又深山幽谷の中にあらうが、物自身の性質には變りは無い筈であるが、人がこれに對して感ずる效用の程度は大いに異らざるを得ない。同じく一個の麥藁帽子であつてもそれが夏である冬であるとは效用の程度は違つて來る。

こゝに於て吾人は效用の決して財物の本質はのみ存するに非ざるを知るのである。さあれたまたこれを翻つて想ふに、人を異にし時を異にし所を異にすることによつて財物の效用に變化あるを免れ難しとするも、帽子は帽子としてテーブルはテーブルとして夫れ々々その本質的效用を有して居ることとも否定することは出来ない。故に私は效用を分つて物理的效用と

經濟的效用とに區分して居る。

即ち財物本來に具有して居る效用を物理的效用といひ、周圍の狀況との關係から發生するものを經濟的效用と稱へるのである。

而して物理的效用については深く説明する必要は無いが、經濟的效用に至つては更にその由つて起る所以を明かにする必要がある。

尤もこの經濟的效用は物理的效用あつて初めて發生するのであるから嚴格にいへば兩者を對立させるのは聊か當を失するかも知れぬが、然る事が説明の上に便誼であるから暫くこの分類に由ることにする。では經濟的效用は如何にして發生するものであらうか。

△一、本質的效用 (Elemental Utility)

の財物に備つて居ることが必要であるのは申すまでも無く、これ無くしては財物といひ得ないのであるから一項目として擧げる丈けが寧ろ冗長であるかも知れぬ。

△二、形式的效用 (Form Utility)

とは財物の形の變化によつて發生するものをいふので、例へばテーブルに就いていつて見ると、テーブルを構成して居る材料のまゝではテーブルたるの效用は發生しないのであるが、これをテーブルに組立てると始めてテーブルとしての效用を發揮するのである。また諸君の着用して居る洋服もそれだけのラシヤを所有して居るのみでは衣服としての效用無いのである。

△三、時間的效用 (Time Utility)

とは時を異にすることによつて發生する效用をいふのであつて、氷水の如きは炎夏の頃には非常に效用があるが、これを嚴寒に供給されては一向に喜ぶものは無い。また麥藁帽子は夏になれば大いに效用を發揮するが、冬には全然無用であるといつた様な譯である。

△四、場所的效用 (Place Utility)

とは場所の變化によつて効用に差異を生ずることを示すもので、例へば野菜類が田舎に於けるよりも都會に於て一層珍重さるゝ如き、魚類が海岸よりも其他の方面に喜ばるゝが如きこれである。また國を異にするために差別の生ずるやうなものもこの範圍に含まるゝもので、同じく鯛でも日本ではあまり珍重されないが、歐米諸國では非常な珍味とされ、また鯛は日本では非常に歓迎されて居るのに、反し、歐米では一顧だもされないのはその一例である。

4 五、數量的効用 (Quantity Utility)

とは物の數量によつて効用の發生することをいふのであつて、即ち物によつては一定の數量があればこそ、それだけの効用があるが、一度一定の數量をかければ効用が皆無となるか、又は大いに効用の減少する場合がこれである。例へば風呂敷の如きものはある一定の大きさがあれば役に立つが、これを小さく切つてしまへば何の役にも立たぬ。又

ダース賣にしてゐるものなどは半端な數になるとそれだけ効用が少なくなるといつたやうな次第である。

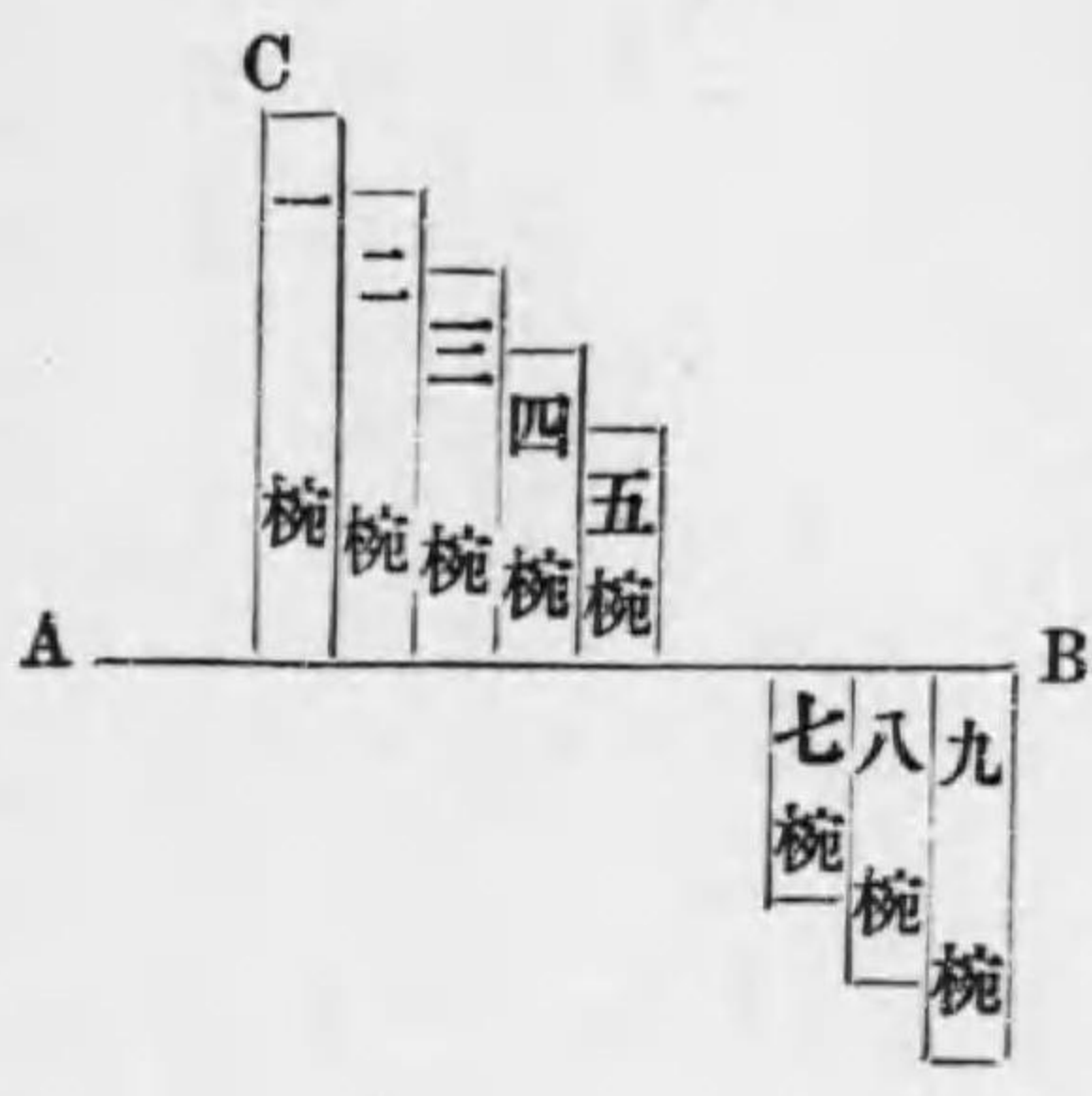
以上述べたやうな場合に効用は發生するのであるが、これをその根本に溯つて考へて見れば、何れも人間の慾望に發してをるのであるから、或る人に對する同一の財物の効用は常に同一であるといふ事は出來ない。即ちその供給が増加するに伴れて勢ひ効用の減少するものあるを免れ難いのである。

第三節 效用漸減の法則

凡そ財物の効用はその供給の増加するに従つて次第に減少するものである。例へば渴したる人に對する水の供給について見るも最初の一杯の効用は極めて大なるものがあるが、漸次二杯三杯と數を重ねるに伴つてその効用は次第に減少し終には全く効用がないようになる。而してこの道

Law of diminishing utility
Law

理は總ての財物に適用して誤無きが故にこれを效用漸減の方則といふのである (Law of diminishing utility)。またこれを人間の側から見れば慾望充足の法則といふのである。今前記の水の例によつてこれを圖解すれば、



第一椀の效用は最も大に、續いて二椀三椀を重ねれば漸次效用を減少し六椀に至つては殆んど效用皆無となり、更に進んで七椀に及べばこれを喫

する爲めに寧ろ苦痛を感じるに至る。

オーストリア經濟學派によつて唱道せられ、漸次世界の學界に普及した限界效用とはこの效用から非效用に移る限界の效用をいふのであつて、前圖でいへば第五と第六の限界を云ふのである。

而して第一から第五に至るまでの各部分を一部效用といひ、第一から第五までの全部を合せたものを全部效用といふ。

效用漸減の方則はほゞ上圖の如くであるが、こゝに問題となるは、この法則に除外例があるのでないかといふ事である。即ち諺にも金持と灰吹はたまる程汚くなるといふ位で、所謂金持なる者は金を蓄へれば蓄へるは益々吝嗇となつて來る觀があり、全く右の方則を裏切つて居るといふ感じを懐かせるのである。

こゝに於てか效用漸減の法則は貨幣の場合にだけは適用し得ないのであるまいかとの疑問を生ずるのであるが、さて仔細にこれを考へて見る

と貨幣もまたこの方則の適用を受けるのである。「長者の萬燈よりも貧者の一燈」といふ諺は明かにこれを物語るもので、たまる程汚くなつた金持も貧棒して居た頃の一圓と巨萬の富を重ねた後の一圓とを比較して見れば、前者に效用の大なるは勿論である。

唯だ貨幣は交換財であつて總ての財物を代用するものである。故に、或一個の財物が供給の増加によつて效用を失ふ程度よりも一層效用の失はるゝ程度が緩慢たるを免れない。これ一般に效用漸減の本則が貨幣に及ばぬものとせらるゝ所以である。

第四節 價値の分類

アダムスミスは價値を分つて使用價値 (Value in Use) と交換價値 (Value in exchange) の二とした。

使用價値とはある個人が或る財物に對して個人的に認むる價値をいふ

Value in use
Value in exchange

のであつて、その財物の如何なる性質のものたるやを問はぬ。

例へばこゝに或る一人があつて、多くの人の忌み嫌ふ蛇を好んだとすれば、その蛇はこの人にとつては偉大なる使用價値を有してをるものゝ、さて齧つて交換價値はと言へば、殆んど皆無である。ある個人は全く好まぬが、これを他に與へれば非常なる效用を生ずるといふ見越からこれに價値を認むるのは後に述べる交換價値を認めたのであつて使用價値では無い。

然らば交換價値とは何かといふに、或る財物が他の財物と交換された場合、その財物の一定量を得る能力を有する時、その能力の認識を交換價値といふのである。

今このテーブルが三個の帽子と交換し得るものとすれば、テーブルの交換價値は三個の帽子であり、また帽子の交換價値はテーブルの三分の一である。而して今日の經濟状態では貨幣が交換の職能を勤めて居るが故に、それぞれの財物の交換價値は貨幣を以てあらはされて居る。このテーブル

ルが十圓といへば、それは十圓の交換価値を有して居るのである。

交換価値はかくの如く使用価値と全く異つて居るやうであるが、よくよく考察を下して見れば決して使用価値を離れて存在するものではない。即ち交換価値を有して居る財物である特定の個人にとつて全然使用価値の無い場合はある。例へば諺にいふ「乞食が馬を貰つた」といふが如きは之であるが、何人かによつて使用価値の認めらるゝもので無くては、第一にそれを交換の對象にする者の現はれやう筈はないから、従つて交換価値の發生しやう道理が無い。故に使用価値と云ひ交換価値といふも価値に二つの基本があるので無く、その主體は使用価値であり、唯だ便誼上二つに區分するに過ぎない。かの限界効用が交換価値を決定するといふのも各個人の使用価値が效用漸減の方則によつて次第に減退する處に胚胎して居るのである。序でにこれを説明して置くところいふ譯なのである。

こゝに一個の帽子があるとする。其の交換価値は十圓の貨幣に相當し

て居るとする。今更に同様の品が一個供給されたとすれば、この度は既に一個あること故何人もこれに十圓の価値を認むるものは無く、八圓位に評價するであらう。かくて三個、四個、五個と漸次増加するに伴れてその評價は次第に低くなり、終には二圓に至つて止るとする。問題はこの點である。總計五個の帽子を順次提供されたとすれば十圓、八圓、六圓、四圓、二圓といふ具合に買ふことゝなるから全部を買ふ爲めに必要とする金は三十圓となり、一個平均六圓に當る譯であるが、これが一時に供給された場合には五個の品は皆同一品であるが故に、これからとつても變り無く、従つて最後の値段たる二圓で五個のものが買取られることゝなるのである。限界効用が交換価値を決定するとは實にこの關係をいふのである。

その他価値の分類に個人的価値と社會的価値といふのがある。また主觀的価値と客觀的価値といふ區別もあるが、いづれも其内容は前述の使用価値と交換価値との分類と同じく單に表現の言葉を異にしたに過ぎない。

最後に斷つて置かねばならぬのは、それでは交換價值は價格と同じでは無いかといふ疑問の生ずる事である。成る程一つの財物と他の財物とを交換するに當つては比較觀念が這入らざるを得ない。比較觀念なしには程度を知る事は不可能である。即ち價值の程度を示すものが價格である。故に結果から見れば全然同一のものであるが、唯だその觀察點を異にするのである。即ち交換價值とは或る財物を他の財物の何程と交換し得るか、の程度、換言すれば或る財物の價值の量を他のそれと比較したもので、これを交換の目的の下に代價として、表はした時に始めて價格と呼ばれるのである。

△第五節 價值の決定要件

價值は如何にして決定するか、これに就ては種々な學説があるのであるが、吾人は大體に於て、次の條件に歸したいと思ふ。

一、效用

財物に於ける效用の存在如何であつて、效用の場合で既に説明した如くである。

二、財物供給の多少

例へば書畫、骨董の類は何故に大なる價值を有するかといふに、其原因は固より外にも存するであらうが、一にはその供給が極めて少ないからである。世に或は絶品と稱し、天下一品と唱ふるもの皆この理に據るのである。野菜魚類等の初物を俗に走りと言つて珍重するものも、たまたま人間の慾求と供給の不足とがカチ合つたに過ぎぬのである。

由來江戸子は走り鯉を特別に珍重し、金を借りてまでもこれを賞味するが、鯉それ自身の味に至つては十日や二十日の時を前後するも決して變化があるもので無い。唯だ供給の不足が、二十日といふに於て大なる價值の差を生ずるのである。

三、需要の緩急

需要の急な時には價值極めて大に、然らざれば價值は少い。例へば廻米の緩急が市場の米價に影響を及ぼすのも需要が急であるからである。

四、生産費

生産費が價值決定の主なる原因であるとは多くの學者によつて説明せられて居るところであるが首肯し難い。論理的、本質的に言へば價值あるが故にわざ／＼生産費を費して財物を作るといひ得るのであつて、價值が生産費を決定するといつた方が妥當である様に思はれる。

例へば何故にテーパーが十五圓かけて生産されるかといふに、始めからそれだけの需要を見越して生産するのであつて、即ち需要がそれだけであるといふ事が原因で生産費はその結果である。然しながら供給者側から見れば生産費が價格を決定する大なる原因となつてゐるので、即ち外部的には生産費が影響するとも言ひ得るが、本質的にはやはり生産費が價值決定の要件とはならないのである。

第五章 經濟生活の發展

現代は實に國民經濟の時代で、更に國際經濟時代を経て世界經濟の域に入らうとしてゐるのであるが、この經濟生活たる一朝一夕に發達したものではなく、實に數百千年の昔から種々の過程を踏み來つたものである。

故に苟も現代に於ける經濟生活の状態を知らうとすれば、勢ひ其の據つて來る所を明かにしなければならぬ。

そも／＼人間は原始草昧の頃から經濟生活を營んだものであらうか。即ち最少の努力によつて最大の効果を擧げるといふ經濟行爲を始めから實行して居つたものであらうか。將來の缺乏に備へるために貯蓄をするといふ心懸があつたのであらうか。それとも他の獸類と同じく餓えては食ひ渴しては飲むといふやうに、殆んど本能の命するまゝに動いて居たものであらうか。今日に於て之を確むる由もないが、經濟生活其れ自身に著

しい進歩を認の得るに徴するも必ずや經濟生活無かりし時代があつたものと想像される。獨逸のカール・ビュルヒャーは之れに對し左の觀察を下してゐる。即ち人間の最初に於ては經濟的性質なく、他の下等動物と其の生活状態に於て何等變る所がなかつた、この時代を經濟前期と言ふ可く、後に至つて人間が火を用ゐ、食物を料理して食ふ様になつてから經濟生活に入つたので、この時を境として以後を經濟期と稱してゐるのである。

而してこの經濟期こそ吾人が經濟生活の發達を研究するに當つて其の對象となるものである。而して經濟生活が如何に發展したかといふことを研究するに當つては其の方法、標準等に自ら差別がある。

其の第一は人間が如何にして生活資料を得つゝあつたか、又得つゝあるかといふ見地から研究するもので、ドイッのフリードリッヒ・リストはこの標準に次の五期の別を試みて居る。

第一期 狩獵時代

第二期 牧畜時代

第三期 農業時代

第四期 農業及工業時代

第五期 商業時代

凡そ人知未開の時代にあつては、人民が自然に存在するものを收得して生活資料に充てるといふことは、まことに賭易い道理といはねばならぬ。所謂海に漁り山に獵るといふ時代がこれ、今日と雖も極めて低級な野蠻人の社會にはその實例を幾多發見し得るのである。また文明人と接觸して多少進歩したといふ民族の中でもこの時代の特徴を發見し得ないでは無い。彼のアメリカインディアンの如き、アフリカ、オーストラリア南洋諸島に於ける土人の中にも多く見出すことが出来る。この狩獵時代を過ぎて第二期の牧畜時代に入れば稍々進歩の跡が認められるのであつて、單に天然の資料を獲るといふだけには止まらず、自ら進んで牛羊等の類を養殖し

て、これを生活資料に供するのである。今日アジアの高原地、即ち西藏、蒙古等で見受けられる所謂草を追うて轉々する人民は尙ほこの時代に屬するものと見て可からう。

而してこの牧畜時代にあつては水草を追うて移轉する爲め定住といふものが無いが、更に進んで第三期の農業時代に入れば、一定の土地を耕してこれから收穫を得ねばならぬので、自然若干の時日はそこに定住する必要を生ずる。殊に牧畜とは異つて土地に對して下した勞力は直ちに逸出し去るものでは無く、漸次其の土地に對する愛着を増して來るのに加へ、これを捨て、未墾の地を開拓するといふことは甚しい勞苦を伴ふのであるから、周圍の状況にして特別の變化を示さぬ限り人はこゝに定住するやうになるのである。従つてこの時代になれば生活の基礎は頗る強固となり、その状態の安全な事は前二期と比較すべくも無い。我國を豊蘆原瑞穂國と稱へた事から考へて見ると、我國がこの時代に入つたのはズット古い頃の

ことゝ想像されるのであるが、之に反して歐洲大陸ではゲルマン族の移轉前には殆んど牧畜でなければ狩獵といつた状態で、農業時代の出現は中古時代に於て始めて見出し得るのである。故に歐洲大陸の開発は極めて新しいものといはねばならぬ。

かくて農業が次第に盛大になつて來て、人口も増加し、文化も向上するやうになると農業の收穫を其まゝに消費せず、これを原料として精製加工するやうになり、こゝに一種の職業が生れるのである。かくて最初は小規模に經營されて居たのであるが、製品に對する需要の益々増加するに従つて漸次大規模のものとなり、所謂工業時代を生むのである。而してこの時代に入れば製品の需給を圓滑にする必要から都市の發生を見、従つてまた交換といふことが重要視されるに至り、こゝに交換の媒介者たる商人の出現を見、第五期商業時代となるのである。而して今日は實にこの時代に相當するのである。

以上の區別に對して注意を要するのは、之等の發達の順序が何れの國に於ても必ず其儘行はれたとは言ひ得ない。

例へば第一期第二期といふ様に劃然と區別されてあつても各時代は茲に擧げた生活方法のみで生活したのでは無く、他の生活方法も並び存してゐる事も記憶してをかねばならぬ。單に當時の生活方法の主なる特徴がそれであつたといふ所からの區別で、現代が如何に商工業時代であるとは言え、農業も牧畜も行はれてゐる様な次第で、唯だ時代の分類法として適當であり便誼であるからである。

次に交換の方法から觀察しても經濟生活の發達を區別することが出来る。

蓋し人類が孤獨生活を營み得ざるは屢々述べた通りで、凡そ經濟生活の存するところ必ず交換を伴ふが故にこれを標準とするは極めて適切であるからである。今ヒルデブランド (Hildebrand) の分類法を擧ぐれば次の如

くである。

○第一期 物々交換時代(自然經濟時代)

○第二期 貨幣經濟時代

○第三期 信用經濟時代

物と物を以て直接に交換するといふことは何れの國を問はず太古未開の時代に行はれた唯一の方法で、現今でも尙野蠻人間には行はれて居る。

而しながらこの方法は常に勞を費すことの多いばかりで無く、需要と供給の一致を見るのが頗る困難である。

例へばこゝに農夫甲なるものがあつて、漁夫乙との間に米と魚との交換を行はうとする。幸にして乙が其の際米を欲求して居たとすれば、この交換は直ちに成立するのであるが、不幸にして乙は米を欲求せずに魚網を欲して居たとすれば、甲は更に魚網を作る人、丙を尋ねて自己の携へた米と魚網と換えた後乙の魚を得るといふ段取となるのであり、今若し魚網工も亦

日比谷公園
大石兄弟館

米を欲しなかつたとすれば、甲は別に魚網工の欲する何物かを得て、これを以て魚網と換えた後始めて魚を得るのであつて、其の煩雜と心勞とは一通りのものではない。従つて一部落の人が極めて稀薄で略ぼ各人の需要するところ及供給するものを想像し得た原始單純な時代はそれで濟んで居たであらうが、追々人口も増殖するし、人間の生活も向上して物資の種類、數量また無限に増加するに及んでは到底是の如き單純な交換方法を繰返す譯には行かなくなつたのである。かくて生れ出でたのが貨幣使用の制度である。而して之が漸次普及し交換は殆んど擧げて貨幣によるといふやうになつて、所謂貨幣經濟の時代を出現するのである。

故に貨幣の使用はいはゆる貨幣經濟時代に入らぬ以前から行はれたもので、彼の幼稚なる貨幣石、米、布、貝等が何れの國でも使用されたのは明白な事實である。

こゝにいふ貨幣經濟の時代とはリストの分類に於ける工業時代にして、

歴史からすれば歐洲の中古時代で、少く共金屬貨幣が一般に通用した時代を指すのである。

かくて貨幣は人の交換作用に對して至大の利便を與へるのであるが、更に近代的商業時代に入ると、商業及交通の發達に伴ひ一回の取引額も巨額に上ると同時に、遠隔な地方との取引が多くなつて來るので、その都度貨幣を以て決済せねばならぬといふのは少なからぬ手數と危険とを感せしむるに至る。

茲に於てか人は貨幣の使用より更に一層便利な信用取引を發明し、所謂信用經濟の時代へと向ふのである。

學生諸子が郷里から學資の送附を受くるに當つても、若し一一現金で貰ふことになつて居たら其の煩雜さ加減は想像に餘りがある。

今日の商人が驚くべき程の巨額な取引を僅かな時間で行つて居るのも一一正貨を用ひずに概ね約束手形、若くは爲替手形を以て之れに代え、また

現金を使用するとしても多くは銀行の當座預金に對する小切手の發行で決濟して居るからに外ならぬ。即ちこれ等のものは皆一定の期間の後に正貨を支拂ふべき約束の下に物品の授受を行ふもので、猶餘支拂の一形式であり、個人間の信認によつて始めて行はるゝが故に之を信用と名づけ、信用によつて交換の行はるゝ時代なるが故に信用經濟の時代といふのである。

しかしながら信用は貨幣を離れて存在するものでは無く、貨幣を背景として始めて効果を奏するのであるから、嚴格な意味から言へば第三期を信用經濟時代とするは當らぬ。寧ろ

貨幣經濟時代
 前期||現金時代
 後期||信用時代

とする方が論理的なるを覺ゆるのであるが、信用經濟の行はるゝことが著しいので便誼上信用經濟時代といふのである。

第三の區別法は生産と消費との距離即ち生産されたものが消費者の手に移るまでの距離によつて經濟生活發達の次第を觀察するものであつて、ライプテヒ大學のビューヒャー教授(Bucher)はこの分類法をこつて居る。今これによれば、

- 第一期 家族經濟時代
- 第二期 都會經濟時代
- 第三期 國民經濟時代

となるので第一期家族經濟時代には生産と消費との間には何等の距離がない。即ち生産者は聽て消費者で自ら耕して自ら食ひ、自ら織つて自ら着、其間交換といふやうなものゝ存在すること無く、眞に自給自足の状態であつた。

若し聊かにも分業といふやうなものが認められ、また交換があつたことすればそれは一家族内のことに過ぎなかつたのである。尤もこゝにいふ

家族は今日の意味に於ける夫婦を基礎とするそれでは無く、今少しく廣汎なものであつたのは勿論である。

然し乍ら人口の増加は自然多數家族の接觸を來し、人智の進歩は長く舊套を纏うを許さぬので、こゝに文化の發達となり、生活様式の改善となり、各人各家の間に各其得意とする所に従つて分業を生ずるやうになると、勢交換の必要から都會の發生を免れぬことゝなるのである。

既にかうなると生産と消費との距離はやゝ距つて來るのであるが、それでもまだこの時代は注文生産の域を脱せず、單に一般の需要を見越して物資を生産するといふことは無い。これを歴史でいへば歐洲に於ける中古時代が當筈るのであらう。

而してこの状態が益々進歩して來ると生産者と消費者との距離は次第に遠かり、其の間に交換を専門とする商業の發生を見るやうになり、我々が日常使用する品物を始め、始んど總ての財物は皆商人が豫め生産者の作つ

注文生産

Industrial revolution

たものを仕入れて置いて各人の需要に應ずるやうになるのである。

従つて生産者も自らが作つて居る財物を誰の使用に供するといふ目當があるので無く、唯だ漠然たる市場を目標とするやうになるのである。

而してまた其の仲介者たる商人も問屋、卸賣、小賣と幾つものに分るゝことになつて生産と消費との距離はいよゝゝ遠くなるのである。何故にこの時代を國民經濟時代と稱するかといふに、この時代は近世國家の勃興と共に發達したもので、即ち政治、經濟、社會状態が地方分權から中央集權的となり、總てが一國內に共通することになつたからである。これを經濟制度に就いて見るも、貨幣制度、度量衡等總て國家を中心として統一せられ、經濟政策、外國貿易、航海業、海外殖民何れも國家を中心とせざるは無い。

所謂歐洲に勃興せる産業革命 (Industrial revolution) なるものもこの著しい産業組織の變化の結果である。

そもこの歐洲に勃興せる産業革命は、十八世紀の中葉過ぎ端を英國

に發し、次いで四五十年後に佛國に起り、更に四五十年を経て、即ち十九世紀の中葉獨逸に發生したのであるが、その原因は工業界に機械の發明があつた爲め、最も便利であり且つ有利なる機械を使用した結果は、當時家内工業であつた生産組織はたちまち工場工業に變り、大規模生産が行はれ、従つて大量生産が有利となり、大經營制度が一般に行はれる様になつたのである。この結果は舊來の産業組織が全然一變して所謂資本主義的生産組織が發生するに至つたのである。これを産業革命といふのであるが、この後商業も發達し、工業の技術も進歩を來し、人口また著しき増加を見たのである。従つて企業が重要なる地位を占むるに至つたのである。以上はビュールヤーの説いた所であるが、然らば我國に産業革命の勃興したのは何時なりやといふに、明治十年乃至二十年と思はれる。即ち最初の起りは紡績業ではあるまいかと考えられるのである。

以上説き來つた事柄は國民經濟までの經濟發展の概要であるが、更に注

意せねばならぬのは國際經濟と世界經濟の區別である。勿論國際經濟は國民經濟の次に發展し來る可きものではあるが、既に現代は國民經濟時代でありながら國際經濟の特徴著しく、或る程度まで、其の域に這入りつゝあるのである。學者によつては兩者を等しきものと觀て、あるが正確とは思はれぬ。即ち國際經濟とは各國民經濟の關係を意味し、世界經濟とは、經濟上世界全部が共通したといふことを意味するのである。

然らば國際經濟は如何にして發生し、發展し來つたかといふに、其の要件として次の諸項目を擧げることが出来る。

一、法律上の安全

- (イ) 外國人の生命財産の保護
- (ロ) 同じく營業上の自由
- (ハ) 通商條約、航海條約

二、交通の發達

- (イ) 海運
- (ロ) 陸運
- (ハ) 交通機關の完成

三、國際間の經濟的分業

四、文化の差異

(イ) 天産物の差異
ロ) 國民能力の差異

今これを簡単に説明すれば、往時の如く、外國人の生命、財産が保護せられず、又營業上について内國人と同等に取扱はれぬ時には自然外國人も渡來するといふこと無く、従つて經濟の共通を見るときは無いのであるが、今日の如く通商航海條約によつて、これ等の缺陷が充さるゝに至つて内外の交通極めて頻繁となるは自然である。

しかしながら交通機關の發達に伴ふ海陸運が完備するで無ければ、到底思ふやうな交通も期待し得ないのであるが、今日の狀態は日に日に完全の域に向つて進んで居るのである。況んや各國間の氣候風土の相違は自ら天産物に相異を來し、各國民の文化の差異は勢ひ他國の産物を求め合ふと

いふ結果を招致し、こゝに國際間の經濟的分業を生じ、一國國民經濟のみにては到底立ち得ないことになるのであつて、どうしても世界共通の經濟を營まねばならなくなるのである。

この域に這入つてくると、世界の政治關係、經濟關係に相對立して、一方は主として國民經濟を本位とし、他は概ね國際經濟を本位とする二大思潮が交錯して行はれるのである。即ち前者は保護貿易政策となつて現はれ、後者は自由貿易政策を取る事になるのである。移民問題等の起る場合は直ちにナシヨナリズムとインターナシヨナリズムの形となつて現れる。例へば、現在の我國の如きは産業政策としては或る程度までは保護貿易政策を採つてゐるも、一度移民問題等の起る場合は自國の立場を有利ならしめる爲めに自由貿易政策を主張するのである。英國以外の諸國も凡そ同一の立場にあるのである。

吾人はこの二大思潮は恐らくは兩者全然相排斥するものではなく、又一

方が消滅するきづかいかいもあるまいと考えるのである。

日本は昨年来「通商衡平待遇」を主張し、交通運輸は勿論、移民の自由、人種の絶體平等、物の交通の自由、總ての方面の人類の交通を主張するも、他の反面に於ては保護政策を採つてゐる。てふ矛盾を敢てしてゐる。かくの如く世界經濟は「大思潮の交錯の時代」である。

第二編 國民經濟上に於ける基礎的要件

第一章 民族及人口

第一節 民族

凡そ經濟なるものは人間を本位としてその維持發達を遂ぐる爲めに存在するものであるから、これが研究に當つて人間に對する考察を缺く譯には行かない。換言すれば人類の研究は實に經濟研究の基礎となるものである。

たゞ而し人類の研究といふことはそれ自身既に漠然たる概念を與ふるばかりで無く、事實頗る廣汎な範圍に渡るものであるから、一朝一夕に論じ盡せるもので無いが、こゝにいふ研究とは國民經濟上に於ての人類研究を

指すのであつて、其の範圍は非常に局限せられて居るのである。

而してこの意味に於ける人類の研究に當つて最も重要なのは民族の性質即ち國民性である。何となれば凡そ一國の國民經濟が發達する否とは全く其の根底を國民性の如何に置くからである。即ち民族若くは國民の心理狀態及び身體狀態とは經濟の基礎を爲すものであるからである。

しからは國民の身體狀態及精神狀態とは何かといふに、身體狀態とは體力のことで、何人も直に理解するが、精神狀態に至つては學者によつて種々要件を異にして居る。しかしながら、概して言へば、所謂徳性のことといふのであつて、大略次の諸點に歸着する。

- 一、勤勉性
- 二、先見性
- 三、規律性
- 四、忍耐性

○ 五、儉約性

即ち世界に於て經濟生活上大なる發展を遂げ、若くは遂げつゝある國の國民は、いづれもかゝる徳性と強靱なる體力とを具備したものであつて、これを缺く民族は常に發展しなかつたのである。

固より國民性は周圍の境遇に負ふものであつて、即ち有形的境遇たる風土、氣候、生活方法の如き、また無形的境遇たる習慣、教育の如きが頗る偉大な影響を與へて居るのであるが、就中教育の國民性に及ぼす影響の極めて大なるを思へば、單に國民性は境遇の然らしむるところと一掃し去るを許さぬのである。今試に上述の諸點について各民族を簡單に比較して見るならば、現在にあつては先づ指をアングロサクソンに下さざるを得ない。ラテンは次に位するであらう。

英國のマーシャル教授が其の著應用經濟學に於て英、佛、獨、米の四國民が如何にして經濟的指導者たるの地位を得たるかといふことを説明して居

に自ら國も富み民族も繁榮に向ふのであるが、土地の割合に人口多きに過ぎる時は却つて貧弱國と墮し易い。之を攷細の點について檢するに、凡そ經濟問題にして人口問題と關係を有せざるは無い。彼の勞働者の供給の如きも人口の多少から來るものであつて、アメリカ合衆國の如く、國土に比して人口の稀薄な所では勢ひ勞働者の必要を感ずること多く、従つて勞銀も高いのであるが、歐洲大陸及日本の如く人口の稠密な地方にあつては勞力も豊富に、賃金もそれに伴つて安いといつたやうな譯である。

こゝに於てか人口の觀察は經濟の研究に當つて閑却すべからざるものとなるのである。而して人口の研究は次の三個の點からするを便利とする。

一、人口の自然的配序

二、人口の密度

三、人口の増減

以下順を追うて簡單にこれを説明して見やう。

第二款 人口の自然的配序

人口の自然的配序を分つて年齢よりする配序及男女の配序とする。

而して年齢よりする配序は一國の生産力に重大なる關係を有するもので、凡そ人間の能率は二十年から五十年までの所謂壯年時代に於て最も高いのであるから、此種のもものが老年及幼少年に比して多い時には其國の生産は自然繁榮する譯である。

現今この問題について痛切に考へさせられて居るのが歐洲諸國である。即ち彼等は過ぐる日の大戰によつて壯丁の多くを失つたので、其の生産力は一方ならず役がるゝといふ慘憺たる光景を呈してをるのである。

次に男女兩性の配合は如何といふに、概していへば何れの國でも男の數は女の數に優つて居るものゝ様で、戦前の統計によれば、僅かに獨逸に於て

女の数が男の数を越えて居つた位のものである。

しかしながら今日では大戦争によつて七百萬以上の男子を失つたことゝ其の配置には定めし大變化を來したことゝ思はれる。

又殖民地には元來女が少ない。これ殖民地は遠く故國を離れて活動する男子の集合する所だからである。

これを經濟上から見れば能率の大なる男子の數多い所が有利であるのは勿論であるが、其の均衡を失する時は或は風紀の問題、或は男女職業問題等を惹き起すことゝなるのである。かくして人口自然の配序はなかく重大な問題であるが、これは人爲を以て如何ともすることは出來ない。

第三款 人口の密度

人口の密度は一定の面積に對する人口配置の割合をいふのであつて、即ち人口が粗であるか密であるかといふことの比較である。故に或る國の

人口の密度如何といふことは經濟上から見て、國力の上に非常な關係を有して居るのである。

例へばこれをシベリヤについて見るに、土地は廣汎にして肥沃なるも人口は極めて稀薄なるが故に當分其の發達は望み難いといふが如き、また人口の稀薄な土地の産業は農業であつて、稠密の地は多く商業であるといふやうに産業の種類を決定するに當つても重要な素因をなして居る如きこれである。

今これが粗密を主なる世界各國について見れば(戦前の統計による)白耳義が第一で、一平方哩六百五十二人の人口を有し、以下和蘭の四百六十五人、イギリスの三百七十二人、日本の三百四十六人等の順で、最も少いのが露西亞の十六人、北米合衆國の三十人であるが、今日では多少變化があつたものと思はれる。これ露西亞、アメリカ等は主として農業殊に粗耕法の行はるる所以であり、又英吉利、白耳義等が工業國として立つ理由である。我國の

如きも人口の密度からいへば實に世界第四位にある譯で、これ雖も農業を以ては集約的農法の行はれ、また漸次工業國たらんとしつゝある所以である。

かくの如く人口の粗密は一國の産業、延いて其の經濟に重大なる關係を有するものであり、而して或る程度までは人口の密なるを要するのであるが、一步進んで密に過ぐる時はこゝに人口の過剰を來し、所謂食糧問題を惹き起し、移民問題を惹起し、ついには避妊論の如きをも生むに到るのである。人口の過剰とは人口に對する生活の資料の不足をいふのであつて、これを分つて相對的過剰と絶對的過剰とする。

相對的過剰とは或る時代に於て生活資料が人口を維持し得ないことをいふのであつて必ずしも永久にさうとはいへない。數年以前我國は米の供給不足から米騒動までも惹き起した。また今日とても國內だけで生産する食糧と人口とを比較したら人口過剰であるかも知れぬが、今後生産方法の改善如何によつては緩和し得ないとは限らない。

之に反して絶對的過剰とは如何なる方法を以てするも人口を收容し得る見込の無いもので、この時には勢ひ海外移民にでもよつて解決する外はない。我國の一部にはしきりに人口の過剰を憂て海外發展を宣傳するものがある。米を主糧に悲觀したものではあまいと思はれる。たゞ前述の如く外國に比して人口の密度の高いことは争はれぬのであるから、食糧問題に就いては充分の考察を拂ひ、單に米食だけで無く總ての食糧をさる方針に出すべきである。

第四款 人口の増減

人口の増減も亦經濟上重要な問題である。古來何れの國と雖も人口の増加は國力の増加を意味するものとして歓迎したのであるが、過度の増加が却つて害を及ぼす虞あるは勿論、増加の原因、増加人口の種類等についても慎重な考慮を拂はねばならぬ。即ち増加の原因が出生率の増加によ

るか、或は死亡率の減少によるか、それとも外國からの移住民によるかに従つて自ら其の及ぼす影響も異り、増加せる人口が女子なるか男子なるか、或は外國人なるか、また外國人としても内國人と全く同化し得ざるものなるかによつて其の關係は種々に變化するのである。

今人口増減の原因と目さるべきものを擧ぐれば、一は出生率と死亡率であり、二は移民である。而してこれを諸國の例について見るに、十九世紀以後に於ては何れの國も増加の傾向を示し、我國の如きも明治初年に三千萬を算したに過ぎなかつたものが、今日では朝鮮、臺灣を除いて約五千萬を數ふるに至つたといふ有様である。

歐洲諸國では獨逸の増加率が最も多かつたやうで、佛蘭西の如きも出生率の少ないことについては常に問題となつてをるが、これとても減少してをるのでは無く幾分かは増加してをるのである。たゞ其の増加率が極めて低いだけの話である。

アイルランドは事實に於て人口の減少を見てをるが、これは主として政治上の問題に基因するのであつて自然であるとはいへない。亞米利加合衆國も近來非常に人口を増加してゐるが、これは出生率の増加といふよりは寧ろ移住によるのであらう。

しかしながら全體を通じて概観すれば、最近に於ける世界人口の増加は出生率の増加及び死亡率の減退であつて、殊に文明諸國では死亡率の減退による増加が多く、この點に於ては我國の如きは出生率の多いかはりにまた死亡率も多く、尙改善すべき餘地が無いではない。

次に最近に至つて何故に是の如く人口が増加するやうになつたものであるか、換言すれば何故に近世以前には人口の増加が著しくなかつたのであるかといへば

一、社會上の諸原因

即ち食人種間に於ける食人の習慣、其他人智未發達及び法制の不備等に

伴ふ小兒殺、犠牲、墮胎、淫賣等。

二、政治上の原因

主として戦争で、従来は殆んど絶えず戦争が繼續されて居たので死傷者も非常に多かつたのである。尤も今次の戦争による死傷者は二千萬人と稱せらるゝから、これが人口の増減に及ぼした影響は尠少では無い。

三、饑饉

今日の如く交通機關が発達し、交換制度が完備すれば一地方に缺乏するも他地方に仰ぎ、一國に不足するも他國より供給を受け得るのであるが、昔は一地方一國に於ける食物の不足は懸て死を意味したのである。

四、疾病殊に傳染病

今日の如く醫術發達せず、衛生設備の不完全であつた頃には、一度傳染病の流行を見れば、忽ち幾多の人を殺したのである。

五、天災

科學の發達せる現今の如く、或は耐火耐震家屋の設備なり、天氣の如きも數日以前に豫測し得るに於ては天災の被害も比較的少ないが、昔はそうではなかつたのである。

六、移住

昔は政治上、宗教上の關係から外國に移住するものが多かつたのである。

第三節 人口に關する學說

上に述べたるが如く人口の問題は經濟と密接なる關係を有し、従つてまた經濟學研究の基調となるものであるから、古來經濟學者にして人口の研究に手を染むる者多く、自然人口に關する學說も生るゝに至つたのである。そもく人口に關する學說は之を一口に言へば、人口の増加は喜ぶべき現象であるか否かに發するものであつて、各其の立脚地を異にするに従ひ立論もそれく相違して居る。

Adam Smith
Marsas

今これが代表的のものを舉ぐれば、人口の増加は益ふべしとする重商主義者の説と全然之に反對するマルサスの人口論である。

第一款 重商主義の人口論

附 アダム・スミス

重商主義とは紀元十六世紀から十八世紀にかけて歐洲諸國を風靡した經濟學說であるが、この派の主張を簡單に述べれば、凡そ一國の貧富は其の國が保有する正貨の高如何によつて決する。即ち正貨の多い國は富み正貨の少い國は貧しいのである。従つて國力を増進するには是非外國貿易、殊に輸出貿易を盛んにして外國から出來得るだけ正貨を取らねばならぬ。

而して輸出貿易を増進させるには其の國の貨物を可及的に安價に生産し得る必要があるといふのである。

而してこの學派は右のやうな見地から人口問題を觀測するが故に、人口が多ければ多い程其の國の生産者は潤澤となり、換言すれば労働者の供給は豊富となるから、従つて勞銀も安く、其の結果生産費も低下され、安價な生産品を外國に供給することが出來るといつて人口の増加を極力歡迎するのである。

この議論が正鵠を失して居るのは何人にも直ちに首肯し得る所であるが、この見やすい點が解らずに尙ほこの種の主張を述べて居る者が現在の我國にも少なくは無い。

十八世紀の末葉に至つてアダム・スミスは右述の重商主義の誤謬を正したのであるが、人口論については彼も樂觀論を持して居つた。

而しながら其の立論の根據は全く重商主義とは異り、彼の所謂仁愛天則思想に出で、居る。即ち社會萬般の事は皆天の攝理によつて調和せらるゝものであるから、人口の如きも自然の調節によつて都合よく調和さるゝ

ものであるといふのである。

第二款 マルサスの人口論

是の如くして人口問題に關する一般の學説は概して樂觀論であり、多数の人々も亦人口の増加が應て國力を増加せしむるものとの見解を充分の信用を以て聽て居つたやうであつた。

たゞゴドウキンが貧民の益々増加せんとする傾向あるを見て、これが原因を各國の人口増加政策に歸した位が異端者の主なるものであつたらう。然るに紀元一七九八年、トーマス・ロバート・マルサスの出で、有名なる人口論を著すに及んで人口論に關する學説はこゝに一變するに至つた。

マルサスは人口の問題を取扱ふに當つて、これを生活資料の方面から觀察した。

彼に云はしむれば、人口の問題は應て人口を維持する生活資料の問題で

ある。生活資料にして潤澤に得らるゝならば人口の問題を論ずるの必要はないといふのである。

マルサスはこの見解から人口の増加率と生活資料の増加率とを比較した。そして結局生活資料の増加率は遠く人口の増加率に及ぶものでない。即ち人口は二、四、八、十六、三十二といったやうな幾何級数的に増加して行くのに對し、生活資料は二、四、六、八、十と算術級数的に増加して行くものであるから、こゝに當然生活資料の缺乏といふ事が起るのであつて、彼の貧困といふ如き、また生活難といふごとき共に自然の結果であるとの斷案に到達した。

従つて彼によれば世の貧困といふやうな悲べき事實はまことに已むを得ないものであつて、これを救済する爲めには勢ひ生活資料の増加率に適應せしむるやうに人口の増加率を制限せねばならぬのである。而して彼はこの制限法に二種あることを説明した。

一は自然的制限であり、他は道德的制限である。

自然的制限とは人口増減の場合に述べた様な原因、即ち戦争、病氣、天災、地變等であつて、人為を以て如何ともすべからざるものである。

道德的制限とは各人が意識的に人口の増加を制限することをいふのであつて、其の最も有力なものは非結婚で、マルサスは貧困の原因は全く各人の無自覺な結婚及之に伴ふ人口の増加にありとなし、若し各人が充分妻子を扶養するだけの確信を得た後に結婚するならば、其の弊害は除かれるのであるから、つとめて結婚に對する態度を慎重にせよと力説したのである。

是くの如くマルサスは貧困を人口の増加率と生活資料増加率との相伴はざる結果也と斷じたるが故に、當時英國に行はれた救貧法には極力反對した。即ち徒らに貧困者を救済することは却つて彼等を墮落に導き、彼等の數を益々増加せしむるものだと爲したのである。之を要するにマルサスの人口論は英國の社會が所謂産業革命による經濟的大變動に際し、貧民

の増加を餘儀なくされて居る事實に願て之が原因を探求した結果成つたものであつて、其の根底を一貫するものは、一個の悲觀思想である。

其の後これに對する幾多の反對論は公けにされたが、人口の増加と生活資料の増加が相伴はぬものであるとの根本の主意は依然として永遠の真理である。

第三款 マルサス人口論の批難

マルサスの人口論はまことに當時に於ける一個の卓見であつて、これが一般經濟界に投じた波紋は極めて大なるものがある。従つてこれに對する反對論も決して尠少では無い。今其の代表的のもの二三を擧げて簡単な批評を下して置かう。

第一の批難は、マルサスが人口の増加率を生活資料の増加率に優つて居るとなすは大なる誤謬で、即ち生活資料の増加は人口の繁殖に比して遙に

大であるからマルサスの説は寧ろ逆であるといふのである。

この説は一面から觀察すれば至極もつともな話で、一般常識からいへば下等動物程繁殖は速かである。例へば犬は一年に二回の出産を爲し、然も一回に六匹も出産するのであるから、これを人間の一回一人で、一年の幾月を要するものと比較すれば前者の繁殖率の後者に數倍するを見るのである。また植物の如きは一粒の種子から多數の種子を生ずるのである。故にこの反對論は眞を穿てるかに思惟されるのであるが、孜細にこれを檢する時は反對に的を失して居ることが明瞭となる。

何となればマルサスの議論は土地の面積に限りのあることを前提として述べたものであつて、如何に他の動植物が其の本然の性に於て繁殖率が大であつても、一定の面積の土地にあつては然く繁殖を許さぬからである。マルサスに對する第二の批難はマルサスは文明の進歩に伴つて人口は増加すると稱するも、人間の精力から觀察する時は寧ろ其の反對に文明の

進むに従つて人は能力を多量に費すが故に、却つて繁殖方面に於ける能率を減退するのでは無いかといふのである。

しかしながらこの議論は全く純然たる想像論であつて、其の當否はこれを實際に徴するの外は無く、加之今日精神的勞働者には無いかといふに必らずしも然らず。また野蠻時代には衛生醫學の發達しなかつた關係上死亡率も多く、爲めに人口が増加しなかつたといふ事實に鑑れば、この議論もまたマルサスに對する抗辯となるもので無い。

第三の批難はマルサスは人口問題に關して頗る悲觀して居るが、今日食料を得べき未墾の土地は世界到る所に散在してをるのであるから、これ等を開拓すれば尙充分生活資料を得ることが出来るといふのである。而してこの見解は次の二個に分つことが出来る。

一、交通機關の發達、外國貿易の進歩に伴れて一國に食料が不足しても之れを他國から仰ぐことが出来る。

二、今日國によつては土地の利用殆んど其の極度に達したるものあるも他の國には尙ほ餘裕のある所が多い。

然し乍らこの議論は全く根本に於てマルサスの主張を認めて居るもので、唯だ當分の間マルサスの心配したやうな現象は現はれてこないといふに過ぎない。

其他佛蘭西の學者ボーリユエーの如きは自國に於ける人口減少の事實から推論して、人口はマルサスの主張する様に増加するものでは無いと唱へたが、これも佛蘭西といふ一つの局限された事實から出發したもので一般に通ずるものとはいひ難い。

之を要するに理論としてマルサスの人口論を根本から覆したものは無く、其の反對論の多くが人口の比較的疎なる新大陸に出で舊大陸に少なかつたことを思へば蓋し思ひ半に過ぐるものがあらう。

第四款 新マルサス主義

マルサス人口論はこれを部分的に批評すれば、或は缺點も存在するのであらうが、其の根本の思想たる人口の増加率は遙かに食料の増加率に優るといふ斷定は容易に覆すべくも無い。

現にイギリスの如きは十九世紀か^も食物不足の國となつた。元來英國は農業國で、自給自足の爲し得る國であつたのであるが、人口の増加は終に農業にのみ頼るを到底許さず。こゝに製造工業の勃興を見るやうになり食料品は擧げて他にまつといふことになつたのである。

獨逸も亦有名なる農業國であつたが、十九世紀の中葉から漸次食料に不足を感じ來り、戦前には約二割を外國に仰いだのである。

フランスはこれを前二國に比すれば幾分餘裕は存するも、それでも尙多少の輸入を仰がねばならぬ現状にある。

たゞアメリカ合衆國のみは食料に關して餘裕綽々たるものがあり、國內に消費して尙餘る所は之を海外に輸出して居るといふ有様であるが、これとても今日の如き勢を以て人口が繁殖して居る限り、近い將來に食糧に不足を來すなきを保し難い。日本が今日食糧に不足を感じて居るのは今更賑々を要せぬ所で、年々の貿易表に現はるゝ米、麥等の輸入額を見れば明瞭である。

かくの如く實例に徴して見るといよ、マルサスの理論は事實と適合して來るので、この理論を實際的に行ふ運動が起つて來た。即ち千八百七十年代の末頃から千八百八十年代にかけてマルサスの人口論を基礎とする種々な團體が出來た。即ちイギリスではマルサス主義を教會で唱へて人口の過剰となるのを防がうといふ團體が現れ、これにつゞいて他の諸國にも同種の運動が起つた。そしてマルサスの所謂道德的制限を實行しやうとしたのであるが、この道德的制限たるやいふべくして仲々行ひ難い。

何となれば人間の性慾は可なり強烈なものであるから自活し得てから結婚しやうなど、理性は教へても仲々これをして服従せしめ得ぬからである。

そこで最近では結婚はしても自分に扶養教育し得る範圍以外に子を産出まぬといふ議論及運動が生れた。而して此の議論はマルサスの議論に根本を發し、而も實行の方法に新軌軸を出して居るからこれを新マルサス主義と唱へるのである。

數年前日本へ來たサンガー夫人の主張もこの新マルサス主義に屬する。

第二章 社會及法制上の基礎的要件

國民經濟を論ずるに當つて人及び人口に關する問題が最も重要なるは前述の如くであるが、既に經濟生活が社會生活の一部であるからには社會生活の基調となる社會上又は法制上の制度を研究することもまた同様に重要さを有して居るものといはねばならぬ。

第一節 私有財産制度

私有財産制度が今日の社會に於て最も根本的の制度であることはこの制度を廢止した場合のことを考へれば直ぐ首肯される所で、今日の社會に慊らざるもの、經濟制度に缺陷を認むるもの皆其の對象を私有財産制度に見出し、これが改廢を論ずるに徴するも明かな話である。

げに今若しこの制度を廢止したとするならば、其の經濟上に及ぼす影響

は甚だ大なるものであるであらう。従つてまた社會萬般の事物に及ぼす影響の程が思ひやられるのである。

そも、この私有財産制度なるものは原始時代から存在したものであるかといふに決してさうでは無かつたらしく、一般的の解説によれば古代には私有財産制といふものは無く、共有財産制度であつたといふことである。而してこの痕跡は今日でもよく見受けられることで、我國でも飛驒の白川の大家族なるものはこの好適例で、大なるものになると三十二三人の家族を抱擁し、其の所有について見るに、茶椀、箸等の日常使用品は各人の私有であるが、其他一般の動産不動産は一家族が共有にして居ることである。

其の後漸次所有權の範圍が擴張せられ動産に及んだのであるが、これとても制度としてといふよりも寧ろ慣習として存在したものの様である。

若し夫れ土地の所有觀念に至ては原始時代には全然無かつたもので農

業時代に漸く發生したものと云つてよからう。然も其の私有財産制度を見るやうになつたのは日本も歐洲諸國も同様で極めて最近の事に屬する。然らばその私有財産制度なるものは如何にして發達したものであるか、如何なる理由によつて認められたものであるか、これについては幾多の學説がある。今之を順次に列擧して見ようならば、

第一、勞働説

この説は英國の經濟學者ミル等の唱へた所で、即ち各人が自己の勞働によつて生産し得たものはよろしく其の人の所有に歸すべしといふのである。

勿論人が經濟上の勞働に服するのは其の勤勞の結果を豫期し、之によつて得た産物を自己の所有にしやうとするのであつて、若しかゝる結果が得られないとすれば何人も勞働をせないであらう。故にこの意味に於て私有財産制度を認むるといふのは一面の道理であ

る。然しながらこの説によれば勞働をせずを得た財物は私有し得ないことゝなるのではあるまいか。例へば坐がらにして父祖の財産を繼承するが如き、他人から財産の遺贈を受けたやうな場合に之を私有することについては説明し得ないのではあるまいか。

第二、法定説

これは獨逸方面に多く見受ける學説であるが、之によれば私有財産制は國家が法律によつて制定したものであるから法律上の産物であるといふのである。

然しながら之も完全な説とは思はれない。何故ならば今日の私有財産制度は形式上からすれば法律の定むる所なるは勿論であるが、法定以前にも私有財産制度が無かつた譯では無い。又この説では何故に國家が私有財産制を認め、之を法律によつて定めたかの理由を説明し得ないのである。

第三、便宜說

この説は私有財産制度の存在する時代は社會發生、經濟進歩等の諸點から見てこれを認むるのが至當でもあり、又便宜有效なるが故に設けてあるに過ぎない。従つて今後文化發達の上にこの制度が不適當となる時には即時廢止するのみであるといふのであるが、この設も何故に便宜であるかを解説して居ないのである。

第四、社會信託説

この説によれば私有財産制度とは社會が個人に財産を信託するのだといふのである。即ち財産を個人及び社會の爲めに有利有益に活用せしむるやう個人に信託するのである。故に所有個人にして財産の使用宜しきを得ない時には社會はこれを沒收することが出来る。

而してこの説は財産の所有者に道德的責任を負はしむることについて他の諸説よりは一日の長あるも、之れまた私有財産制を認むるに至つた

理由を説明し得ないのである。

第五、占有説

これは財産は人の占有によつて生じたものであるとの説である。

然しながら今日實際上の私有財産なるものを觀察するに、個人の占有によつて發生したものは甚だ稀で、多くは公共的財産の變化したものである。

積六、自然法説

この説は所謂天賦人權といふが如き見地から私有財産を論ずるものである。

即ち人間の財産權は自然から賦與されたものだと言つるのであるが、この天賦人權なるものが既に甚だ疑はしいもので、これを前提とする結論の薄弱なることはいふまでも無い。

上述の如く私有財産制を認むることに關する解説は種々あるのである

が、何れも適切なりと思惟し難い。今比較的合理的なりと目すべき理由を擧げて見れば大體に於て次の三項に歸すべきであらうか。

一、經濟人格自然の結果

人間の經濟行爲は外界の事物を支配するといふことにある。而してこの支配力を擴張して行く時は自然の結果として私有の觀念を生じてくるのであつて、既に經濟行爲無しとせば已む、苟も經濟行爲を認むるからには私有財産の發達は當然の歸結である。

二、人格の發達に必要である。

この思想は東洋には古來から存在したもので、孟子の所謂恒産無ければ恒心なしといつたのもこの觀念に外ならず、管仲の衣食足つて禮節を知るもこの思想から來るのである。

そも、人格なるものは、これを哲學的に解説すれば廣い意味の解釋があるが、人間の獨立的品性といふことは人格の向上に最も必要なもので、

其の口々の食に窮して居る者にこれを望み難いのは勿論である。この意味に於て私有財産制は必要なものといはねばならぬ。

三、生産の増進に必要である

人は自己の勞作の結果になるものが自己の所有となるので無ければ喜んで勞働に従事するものではない。神ならばいざ知らず今日の人間には到底自利心の存在を否定し得ない。

今經濟的觀察を離れてこれを心理的に見ても所有慾は人間性自然の發露であると思はれる。ラッセルによれば人間の慾望は所有慾と創造慾とに分たれ、而して將來の社會は所有慾を失くして創造慾によつて成立するに非ざれば到底救はれるもので無いことであるが、既に所有慾が人間本能の一である以上其の禁止は不合理で寧ろこれを善導すべきではあるまいか。従つて私有財産制は勞働の動機を與ふるものといふべく、これ國家が法律によつて該制度を認むる所以であらう。

しかしながらこれを長い歴史の過程から見ると私有財産制も決して絶對的のものでは無い。即ち以上の如き利益があると同時にまた弊害が無いでも無い。

そも、財物は正當なる使用に供するため存在してをるものであるから、若し之が不當に使用せらるゝやうなことがあるか又は其の獲得に不正が伴ふやうな場合にはこれを矯正せなければならぬ。又社會共同生活の利害から打算して種々の制限を設け得るのである。

例へば租税の如きは國家が個人の私有財産の一部を徵集するもので、私有財産制度の本旨に反するやうであるが、國家を維持する上から見て止むを得ないのである。

或は非常徵集といひ、或は鐵道敷設に必要な土地收用法の如き、皆この主意に外ならぬのである。

加之現代では私有公有の二つに區別されて居る財産の中、公有財産の區

域は次第に擴張されて行く傾向がある。即ち道路、河川、山林等の公有となつたものゝ多いのは勿論、教育、衛生等に關する設備、學校、圖書館、博物館、病院等は皆公有財産となつて來たのである。

其他公益事業として鐵道、電信、電話、電燈、瓦斯、水道等も漸次公有となりつゝある。しかしながら一方私有財産も擴大せられて居らぬ譯では無く、從來私有財産は有形のものゝみに適用されたのが今日では無形のものに及んで居る。

例へば專賣特許權、意匠權、著作權等の如きはこれである。

最後に私有財産制に關聯して述べて置かねばならぬのは相続と遺贈とである。

遺贈權は原財産者の有する權利であつて、相続權は子若くば親族が原財産者の所有を請求する權利である。

而してこの二個の權利は今日充分認められて居るのであるが、其の源は、

全く家族制度に發して居るものゝやうである。

我國は長子相續制度で、所謂家督相續は我國特有の制度といふべきであらうが他にも同様の制度が無い譯では無く、英國の貴族社會の如きはそれである。

然しながら一般大陸諸國は皆分配制度で、支那の如きもこの部類に屬する。

蓋し個人本位の國にあつては一家の財産なる觀念頗る薄く、家族本位の國にあつては家族財産を有する必要があるので、其の制度も自らこの標準によるべきであるが、今日の如く個人本位の色彩漸く濃厚ならんとするに際し、日本及英國に長子相續制のあるは單に過去の遺風と見て可なりであらう。

翻つて相續なるものは何故にこれを認めらるゝかといふに結局は便宜問題に歸着する。即ち家族の相續を計らうとするので、世の財産を作らん

とする者の意思が多く子孫の計を爲さうとするにあるを見てこれを尊重するのである。若しさうで無ければ經濟的管理なるものは中斷せられて生産は従つて萎縮すべく、爲めに社會の利益を害すること尠少では無い。既に私有財産を認むるからにはこれが當然の歸結として相續制も認むべきであらう。

尤も私有財産制もその弊害を流すに當つては之を廢止し若くは制限する必要がある如く、相續も之に適當の制限を加ふる必要がある。ジョン・スチュアート・ミルは親たるものは其の子に對して相常の財産を遺す義務があるか、換言すれば子には親に對して財産を遺すことを要求する権利があるかに論及して、親は子に社會の生存競争に耐え得るに足る準備を與ふれば足る。それ以上に財産を遺す必要は無いとの斷案を下して居る。

寔にミルの言の如く漠大なる財産を坐して受くるといふが如きは寧ろ害を伴ふ場合が多い。これ今日累進課税によつて相續税を徵集する所以

である。

第二節 經濟上の自由權

現代に於ける經濟上の事實及び現象が私有財産制の上に立つて居ることは前述の如くであるが、これと同時に經濟上の自由權といふことも閑却し得ない根本的の要件である。

そも／＼經濟上の自由が權利として認めらるゝに至つたのは人身の自由に其の源を發してゐるのであつて、人身の自由は人類の發達に伴れて認められたものである。

即ち古代にあつては何れの國たるを問はず人身の自由は認められなかつたもので、彼の奴隸制度の如きは最もよくこの間の消息を物語るものであらう。

然るに佛蘭西革命以來漸次自由平等の聲の高調を見るに至り、終に今日

の如き自由を生み出したのである。

これを我國についていへば明治維新以前には自由なるもの無く、其のこれあるを認められたるは實に明治維新以後のことに屬する。

今經濟上の自由權なるものを分類せば、大體に於て次の四つになる。

- 一、移動の自由 (Freedom of movement)
- 二、營業の自由 (Freedom of occupation)
- 三、競争の自由 (Freedom of competition)
- 四、契約の自由 (Freedom of contract)

以下簡單に之が説明を下して見やう。

第一款 移動の自由

移動の自由は近世に至つて認められたもので、古代は何れの國も各人の移動の自由を認めなかつたのである。

即ち或る時代には制度により、或る時代には習慣により、或る時代には知識の缺乏により、また或る時代には交通の不備によつて移動が制限せられたのである。制度の上からの制限とは奴隸制度の如き又我國封建時代の制度の如きがこれである。

習慣上及知識の缺乏からする制限とは制度の上では禁せられた譯では無いが習慣により又は無知から自然に制限せられたのである。

然るに現在に於てはかゝる制限は全然撤廢せられた上に種々の交通機關其の他の發達はよく各人の移動を自由ならしむるに至つた。

かくて今や各人心の欲するまゝに移動して居るのであるが、然らばこれ等の人々は如何なる動機によつて移動するのであるか、換言すれば人類移動の原因は何であるかといふに、勿論種々の事情も介在して居るのであるが主として經濟上の動機から來るものが多いやうである。即ち生活上の動機から來るのである。而してこの結果として生ずる問題は之を國內

にしては都市人口集中の問題となり、之を外にしては移民問題及殖民問題となるのである。

何となれば都市は就職其の他に於て大なる便宜を有するが故に、各地方にあつて生活の苦惱を啣つものは自ら都市に集中することとなり、其の局農村の荒廢を來し、食糧供給の不足等を生むに至るのである。またこれと同じ理屈で國內の富源極めて少く、これ以上開拓するも餘り望み無きか、また假にあつたとしても既に前人によつて開拓されて居る時に、海外の新天地に向つて去らんとするは自然の人情であるが、其の結果は被移民國の驚愕となり、こゝに移民問題てふ厄介な問題を惹起するに至るのである。我國對北米合衆國の如き其の好適例である。

第二款 營業の自由

營業の自由とは職業選擇の自由をいふのであつてこれにも亦種々の變

遷がある。

往昔は何れの國でも個人の自由に職業を選択することを認めなかつた。例へば印度、エジプトの如きは階級によつて職業が決定せられたのである。

日本も最初は世襲的に職業が定つたのであるが、其の後稍進んで來てもこの習慣は容易に去らず、依然職業の選擇の自由は無く今日に至つたのである。然るに近代に至つては舊來の法律、制度、習慣等が改廢せられ、こゝに純然たる職業の自由が生れたのである。

歐洲諸國も日本と同じ様な歩調をとつたものゝ如く、中古以前に職業の自由無かりしは勿論、封建制度が破壊せられて都市が勃興し來つた時も所謂商業組合なるものがあつて各人の自由は認められなかつたのである。然し乍ら近世國家の發達するに従つて、國家即ち中央政府が地方的自治團體の權力を奪ひ國家自らが特許することによつて營業の自由を許可す

ることゝなつた。今日と雖もこの風が残存して居る。例へば風紀、衛生に關するものは警察で特許せられて始めて營業權を認められるが如きこれで、料理店、興業場、理髮店等は皆許可を要することゝなつてをる。

又公益に關する事業例へば鐵道、電燈、瓦斯、鑛業等は皆主務官廳の許可を得て後始めて營業を開始するのである。

是の如く今日でも或る程度まで營業の自由は制限を受けて居るものゝ一般に職業の選擇は自由となつたといはねばならぬ。唯だ多くの人が依然として容易に轉職するを好まぬのは習慣の然らしむる所であらう。

第三款 競争の自由

經濟上に競争の發生したのは利害の衝突といふことが其の源泉をなしをるのである。従つて利害の一致するところに競争は無い。故に經濟上に於ける競争の概念は二人以上の人が同一の經濟的利益を取得しよう

として争ふ状態だといへるのである。

而してこの原因を訊ぬるに營業の自由といふことが其の前提たるは勿論であるが、こは寧ろ形式的のもので更に深く考察を下せば、各人が心理的に獨立思想を有するに胚胎するのである。換言すれば各人が自恃心を有することが競争の發生する心理的経路である。

かくて競争には種々あるが經濟上最も主要なるものは商業上のそれであつて、それには個人間のものと國際間のものがある。

個人間の競争は自己の商品を成るべく多く販賣せんが爲めに華客を争奪するを云ふ形式で現れ、國際間の競争は國民經濟を基礎としていふもので、日本の綿糸綿製品が印度市場に於て英國品と角逐するといふが如きこれである。今や戦後の反動として生じた不況時代に處する爲め列國の經濟競争は漸く酣ならんとして居るのであるから、我國民たるもの勇奮一番この競争に榮冠を得る必要があらう。

それはさてをき、かくの如き競争が經濟上に行はるゝ利害得失はごうであらうか、舊來競争は消費者の見地から解釋して一般に利益であるを認められたのである。即ち競争が生産者間に行はるゝ時は生産品の分配に至つて自ら安價となるからだといふのである。且つ又競争は諸種の事業の進歩改善を促す動機であると認められた。而してこの意味に於ける利益は今日でも一般に認められて居るのである。勿論既に營業の自由を認められた以上、こゝに競争の發生を見るは當然の歸結であるといはねばならず、従つて競争は到底避く可らざるものといはねばならぬのであるが、自由競争が國民經濟上から見て有利であるか如何かといふに至つてはまた一問題たるを失はない。先づ第一に現代に於て正當なる競争が行はれて居るかといふことである。即ち總ての競争が機會均等に行はれて居るかといふに必ずしもさうでないといふよりか寧ろ弱肉強食の傾向があるといはねばならぬ。加之現代に於ける自由競争は生産及分配上に於て浪費が多い

といふ缺點を免れない。

これ一面に於て競争廢止の聲をきいて居る所以である。

たゞ夫れ前述の如く競争は人の根本性に出づるものであるから、其の絶體的廢止は到底望み難い。従つて成るべく其の弊を除くことにつとむべきである。

次に競争に關して起る今一つの問題は今日の如く競争が激烈となるに於ては終に人生の共同生活を破るに至るのではあるまいかといふのである。即ち經濟上の利益は倫理道德と背馳するのではあるまいかといふ疑問である。今之を歴史的に研究するに競争も他の事項と同様に進化して居るのである。

人文の發達しない時代には所謂弱肉強食的の競争が行はれ、然も商賣上の不正手段の如き當然として行はれ、日本でも昔は商人といへば不正直なもので通つたものである。

歐洲諸國にもこれと同様の觀念は存在したもので獨逸語の *Handel* (商業) なる語は *Taühen* (コマカス) なる言葉の變化したものだといはれ、又英語の *Bargain* (取引) なる語も詐僞といふ言葉の轉化したものといふに至つては往時の競争の標準が極めて低く、目的の爲めに手段を選ばなかつたことを知るに足るのである。又昔は商業上に腕力を用ひた例も決して少くは無く、十六七世紀の頃和蘭、ベニス、ナポリ邊は海外通商が甚だ旺盛を極めたものであるが、其の大半は海賊的行爲であつたといふ。

然るに今日に於ては是の如き状態は容易に見ることが出来ない。即ち競争の標準は次第に向上し、今日では一國の道德、法律、習慣に反するものは競争とは認めないで漸次競争の倫理化を見て居るのである。

第四款 契約の自由

契約の内容は法律上の問題であるから、こゝでは省略することゝするが

今日では契約を自由に取結んで各人間の関係を定むることは、それが法律に反せざる限り國法によつて認められて居る所である。而してこの契約の自由なるものは經濟上に密接なる関係を有してをるもので、之を契約の自由の認められなかつた時代と比較すれば蓋し思ひ半ばに過ぐるものがある。

そもく、古代に於ける對人關係は其の身分によつて定められたものであつて、主従の關係はあるが雇傭關係といふものはなかつた。

然るに人身の自由が認めらるゝに伴れて契約の自由も認めらるゝやうになり、今日では雇主と被傭人、資本家と勞働者の關係は皆契約によつて其の關係を決して居るのであり、其の他一般貸借の如き皆各人間の自由の契約によつて行はれて居るのである。従つて今若し契約の自由にして失はるゝことゝならば、現在の經濟組織は根本から變更せらるゝであらう。

而して契約が經濟學上に注意を惹くようになつたのは近々四五十年前

のことで、ペルリン大學のワグナー教授の如きはこの研究については第一の功勞者であらう。

第三節 習 慣

習慣は競争と相對持するもので、これが經濟上に及ぼす影響は頗る大なるものがある。勿論習慣の方が社會人事を左右し得た程度は古に溯る程多くなるのではあるが、今日とても習慣に支配せらるゝ事の方が多し。即ち理論からいへば經濟的事實は競争の理によつて支配せらるゝ筈であるが、實際は習慣の力によつて居る場合が少くない。

例へば地代の如き、小作料の如き殆んど習慣を基礎として決せられて居る有様である。殊に消費の場合には最もよく習慣に左右せらるゝもので、商賣に所謂得意といふものがある。即ち消費者から見れば「行きつけて居る店」で、我々が物を買はうとする時には知らずくゝそこへ足が向くので

ある。

理論からいへば最良の品を廉價で提供する店舗へ行くべき筈であるが永年の習慣となることなか／＼思ふやうにならぬのである。又我國民が米を常食とするが如きも一種の習慣であるといはねばならぬ。

要するに習慣は一種の心理的作用で、動もすれば上述の如く合理的の事實に反對な方面に作用する傾向があるので、競争の弊を矯むるといふような効果もある。

第四節 權力

國家の權力は立法或は行政の形式で現はるゝものであるが、この經濟上に及ぼす勢力もまた輕々に看過するを許さない。

凡そ今日の經濟的事實にして權力の支配を受けないものは殆んど無いといつて差支無く、國家經濟即ち財政のみならず國民經濟が其の影響を受

くるは自明の理である。かの競争の如き、衣食住の如き、労働時間の如き、凡て國家權力の支配下にあるのである。また國家權力直接の支配を受くる財政が國民經濟を壓迫することもある。即ち政府があまりに多數の公債を募集する爲めに一般金融市場を壓迫して金利を騰貴させ、これが爲め民間事業の生産費を高からしめるといふことも無いでは無い。

然し乍ら概して平時は國家の權力も經濟の法則に逆行するものでは無く、國民經濟に順應して權力も發動して居るのであるが、戦時に於ては國家の權力が經濟の法則、經濟的事實を支配するのを普通とする。故に學者によつては平時の經濟を契約經濟といひ、戦時の經濟を權力經濟若くは變體經濟といふのである。又物價問題の如きは平時にあつても國民の消費と重大なる關係を有するが故に、權力の發動によつてこれを調節する場合が多い。

第三篇 生産論

(production)

第一章 生産の概念

△ 第一節 生産の意義

そもそも、經濟とは人間がその生命を全うするが爲めに外界の財物を支配することはいひ、特に財物を得るを以て第一義とする。而してこの如何にして財物を得るかといふのが生産の研究問題である。

人は如何にして財物を得てをるかといへば、之を個人的に見れば種々あるが、大別すれば

(一) 無主物の占有。(二) 與贈。(三) 交換。(四) 生産であるが、前三者は畢竟するところ第二義の問題で、最も重要なものは第四項、即ち生産によつて物を得る

ことである。

然らば生産とは何を意味するか。固より天地間に於ては物を創造するといふことは到底認むることは出来ない。何んとなれば吾人が日常食して居る米について見るも、種子を播いて之を收穫するまでの過程を表面から見たばかりでは何か新しいものを作り出したやうに感ぜらるゝが、これを天地間に存在する分子及原子の量から見れば決して其の間何等の増減のあるものでは無いからである。

故に經濟上に所謂生産とは決して創造の意味では無く、單に效用を作り出すことをいふのである。こゝに於てか效用作成の方法如何によつて生産も自ら技術的生産(Technical production)と經濟的生産(Economical production)とに分れる。

技術的生産とは或る財物を物理的若くは技術的に作り出すことで、例へば農業によつて穀物を收穫するが如き、個々の木材を合せて卓子を作るが

如きこれである。

また經濟的生産とは物自身には何等の變化を生ぜず、に效用を作り出すことをいふ。商業の如きがこれである。

商業は場所の變化と時の變化と二つの理由から效用を生ずるものであるが、これが生産であるか否かについては古來からづるふん論議せられたもので、往時は生産とは認められなかつた。然しながら生産の眼目は效用を生ずる事であるから商業も生産の一種と見るを至當とするのである。

尤も單に時と場所との變化だけで物の本質に變りは無いのであるから生産といはれないといふのも一理はあるが、前述の如く生産は決して創造では無く、若し嚴格にいふならば、所謂生産なるものも單に原子や分子の位置を動かしたに過ぎないのであるから、商業を生産といへぬなら他の農工業も生産といへなくなるであらう。

次に生産は何の爲めにするか、生産の目的は如何といふに、そが人類の慾

望を満足せしむるにあるは勿論であるが、今日に於ける生産は自己の消費を目的とするものと他人の消費を目的とするものとの二つに區分されて居る。

古代社會經濟の發達しない頃の生産は専ら自己の消費を目的とするものであつたが其の後交通商業の發達するに伴つて殆んど他人の爲めにするものとなつたのは先に經濟生活の發達を述べた際に明かにした通りで、前者を自用生産といへば後者は註文生産、更に進んで大量生産とでもいつたものであらうか。

而して其の何れたるを問はず、生産は消費の前提であつて總ての經濟行爲の發程點である。

第二節 生産の要素

(Elements of production)

element

原始時代の單純な生産でも將た又今日のやうな複雑な生産でも之れを完成するには種々の力、様々の要素を必要とする。即ちこれが中心となる人間の力は勿論其のまた對象となる自然の力、殊に土地及び資本の必要が存するのである。

今これを農夫の例にとつて見るも、一俵の米を收穫するにはこれに携はる農夫それ自身の勞力の外に一定の土地が無ければならず。これに施肥肥料も無ければならない。即ち勞働、土地、資本の三者を要する譯である。而して右の場合に其の土地を購入する爲めに若干の代價を支拂ひたりせば、この農夫から見れば土地は天然といふ一生産要素たると同時にまた資本といふ要素をも兼ねて居るのである。更に同じ農業であつても單に一俵二俵の收穫を争ふのでは無く、數千町歩の土地を耕す大農式經營になると、右の土地、資本、勞力の外に尙技術なる新要素を必要とするに至る。従來は勞働、土地及資本を對等の位置に置いて生産の要素と稱へたので

あるが、寧ろ労働を主要素としてこれに土地、資本及技術を加ふるのを至當であると信ずる。近代に於ける生産作用中技術は極めて重用な地位となつてきたのである。以上の見解はシュモラー教授の採用する所であるが吾人もまたこの見解を適當と認めざるを得ない。

而してこの四要素の生産に對する緩急即ち生産にとつて何れも缺く可らざるものたるは勿論であるが、とりわけ何の要素が重要であるかといふことになると時代によつて異つて居るものといへよう。即ち社會状態の幼稚な時代には労働と土地とが二大要件であつたが、其後人口の増加と文化の向上とに伴れて生産の規模が次第に大きくなるに及び、資本次いで技術が缺く可からざるものとなり今日では資本が最も主要なる地位を占むるに至つた。資本主義經濟なる語の盛んに使用せらるゝ所以である。次にこれを國民經濟上より見れば各國皆其趣を異にする状態で、我國の如きは戦前に於ては労働は不足しなかつたが、土地及資本に不足を感じ技

術に缺陷があつた。然るに戦後は資本に於てはやゝ足るやうになつたものゝ土地に於て不足し、技術また完成せりといへぬのである。

これに反してアメリカの如きは資本及土地とに不足は無いが、労働を缺き、英本國は日本と稍趣を同うして居る。

第二章 勞 働 (Labour)

第一節 勞働の本質及種類

生産の要素として最も主要な地位にあるものが勞働であることは上述の如くであるが、然らば勞働とは何をいふのであるか、其の本質は如何といふに、勞働とは人間の或る働き即ち效用創造の目的を以てする心力及體力の發動であるといつて可からう。従つて必ず外界の目的物を伴ふもので言葉を換へていへば財物を得んとする目的の下に働く力である。故に勞働は其の本質として苦痛を伴ひ、遊戯とは全然異なるのである。即ち遊戯は行爲其の物が目的であるが、勞働は或る物を得んとする爲めの手段であつて行爲其自身は目的でない。

かくいへばとて勞働が全然遊戯の分子を含まぬといふのでは無く、或る

場合には可なり勞働其のものに快樂を伴ふことがあり、また然かあることが勞働の結果を有效ならしめる爲めに望ましいことではあるが、多くの場合に勞働は苦痛であるといつて大過なからう。

勞働の種類については學者によつて各自説を異にして居るが、今代表的なもの二三を挙げれば、勞働を其の性質の上から見て、

一、精神的勞働 (Mental Labour)

二、肉體的勞働 (Physical Labour)

とに分ち、主として頭腦を用ふる勞働即ち法律家、醫師、宗教家等のそれを精神的勞働といひ、主として肉體を用ふるものを肉體的勞働と爲すものもあるが、この區別は甚だ明確を缺くものといはねばならぬ。何んとなれば如何なる精神勞働も多少肉體的方面を伴はぬものゝ無いと同様に、肉體的勞働も全然精神的方面を閉却し得ないからである。

次に勞働を品質の上から區別して

一、熟練勞働 (Skilled Labour)

二、不熟練勞働 (Unskilled Labour)

となし造船工、鐵工等の如く一定の練習と熟達とを要するものを熟練勞働と呼び、人夫人足の如く何等の練達を要せぬものを不熟練勞働と唱へるのである。

而してこの區別は英國あたりで古くから用ひられたものであるが、これまたあまりに正確なものとはいへない。何故なれば如何なる勞働でも熟練を要せぬものは無く、而して其の差別は單に程度の問題に過ぎぬからである。

又勞働を其の範圍から區別して

一、指導勞働 (Leitende Arbeit)

二、執行勞働 (Sustitrende Arbeit)

とに分つものもある。

これによれば直接生産に従事するものを執行勞働といひ、これ等の執行勞働者の指揮に當るものを指導勞働といふのである。而して指導勞働を更に事務的勞働と技術的勞働とに分ち、會計部長、營業部長などいふ主として事務に當るものを前者となし、技師技手の如く技術上の指揮監督を爲すものを後者とするのである。

また勞働の定不定より分類して

一、定業勞働

二、不定業勞働

となし、一定の職業に従事するものと、浮草の如く轉々として職を求めて歩くものとを區別する。而して不定業勞働者も數からいへば可なり多いもので、東京でも本所深川方面から日々五六千人以上この種の勞働を出して居る。

英國の古典學派ミル・アダムス・ミスの如きは勞働者を生産的勞働者と不

生産的労働者とに分ち、藝術家及び自由職業の如きはこれを不生産的労働として經濟學上に取扱ふ労働の部に入れなかつた。これ實に労働者を狭義に解釋するもので誤解を生じ易い。何んとなれば不生産労働者も直接生産に貢献せずとも間接には貢献するからである。

然らば經濟學上に於ける労働を廣く解釋したら如何なる範圍まで入れてよいかといふと、これはまた頗る難問で直接生産に従事するものを労働者とするは勿論だが醫師、官吏、法律家等が労働者であるといふに關しては相當異論もあるべく、官吏の如きは國法上からいへば労働者では無い。然し乍ら實質上からいへば自由職業と共に労働者の部類に屬すべきものであらう。唯だ生産の中心として論ずる労働者は主として生産に關するものであり、これをまた獨立労働者即ち企業家及び賃金労働者とに分つのであるから、この分類の意義は企業家と労働者との區別に存するのである。

現代の産業組織に於ては普通労働者と言へば賃銀労働者を指すのであ

るが、併し獨立労働者即ち企業家も純理の上からは一種の労働者に過ぎない。何んとなれば企業家の労働も財物を得んが爲め、即ち效用を創造する目的で心身を働かすのであるから、この點から觀れば賃銀労働者と何等異なる所は無いのであるが、現代の産業界に於ては企業家は雇主の側にあり、賃銀労働者を雇入れて、これに一定の賃銀を給するのであるから賃銀労働者とは立場を異にするのである。

茲に注意をして置きたい事は、普通世間では資本對労働といふ言葉を以て兩者の關係を言ひ表はしてゐる事である。これは明かに誤つた言ひ表し方で労働者と資本家とは利害は相反するものでは無く、今日の労働問題の本質は労働者對企業家であるから、企業對労働と改むべきであると思ふ。今日資本と労働とが對立してゐる様に考へるのは、企業家は成功の結果は資本家になり、或はまた今日の企業家は多く資本家であるから、勢ひ其の資本のみを觀て不用意に斯く斷するのである。即ち企業家の資格と、資本

Profit
wage
interest

家の資格とは本質的には相異なるものがある。今之を分類すれば

企業家は利潤 (Profit) を取り

4 労働者は賃銀 (Wage) を取り

資本家は利子 (Interest) を取る

のであるから労働問題は利潤と賃銀の問題である。

この點を考慮の中に入れて現代の産業に従事してゐるものを區別すれば

經營資本、事務員、労働者の四に別つことが出来るのである。

而して現在の生産組織に於ては經營者は一方に於て資本家であるが故に、この關係に一般公衆即ち消費者が對立して、こゝに労働問題なるものは經營と資本を一緒にした經營者と事務員、労働者を一緒にした労働者と、一般公衆との交錯した問題と云ひ得るのである。

最後に労働者の地位は最初は充分に認められなかつたのであるが、これ

は何れの國の歴史を見ても明かな事である。從て士君子は之れに當らずに下級の奴隸が任じてゐたのである。即ち古代ギリシヤに於ては之れに従事したものは奴隸であり、我國に於ても大寶令には「奴婢」の制度があつた。之れは一種の奴隸であつて、中世に於ては農奴なるものと稱えられ、我國で言へば水呑百姓に近いものであつた。

近世、殊に商工業時代に到つて初めて労働者といふものが自由を認められて來たのである。

この見解は極めて概括的ではあるが、何れの國に於ても認めらるゝ傾向であつて何人も一致すると思はれるのである。兎にも角にも社會の進歩發達につれて多々益々労働者の地位の向上を來しつゝある事は動かす可らざる事實である。

第二節 勞働能率

既に勞働は生産の主なる要素であるとするならば、これが如何なる程度に生産を支配するかといふ問題は當然起るべきもので、こゝに能率の問題を生ずる。

そも、勞働能率は勞働力から生ずるもので勞働力は更に個人的勞働力と組織的勞働力とに分たれる。

蓋し個人的勞働力が生産に必要なものは今更ら言を用しない。又現在の如き經濟制度の下にあつては勞働に關する組織如何は生産に大なる影響を及ぼすからである。

第一款 個人的勞働能率

個人的勞働能率は勞働者の(一)體力(二)知力(三)道德力に起因するもので、其

の大小如何によつて生産に種々なる影響を及ぼすのである。

一、體力

凡そ生産勞働に従事するものにして體力の強大なるを要するは勿論で或る一つの作業を一人で果し得ると二人三人を要するのでは其の間大なる瘡底を存するのである。従つて體力の涵養といふことは極めて必要な事で、これについては積極及消極二方面の問題を生ずる。所謂體力の獎勵の如きは前者で、飲酒癖の矯正といふが如きは後者に屬する。最近我が内務省が保健調査會を設けたるは、こゝに鑑る所があつたのであらう。

二、知力

知力が勞働能率に及ぼす影響はまた決して尠少では無い。如何なる場合を問はず概して知力ある者は能率に於て勝つてをる。殊に近代工業にあつては勞働者が科學思想を有する否とによつて其の能率に大い

なる差異を生ずるのである。従つてこれは労働者教育問題となる。この労働者教育問題は議論は別となるが今では之を労働者側から観て労働運動の指導者養成の上から唱導せられてゐるのである。

三、道德力

道德品性の能率と至大なる関係を有するは前二者と變りなく、現在企業家が賃銀の増加によつて労働者の怠惰性を誘發するを嘆ずるが如き、明かに労働者の道德性の發達せざるを物語るもので、此種の労働者によつて製作されたる工業品が動もすれば世の指彈を蒙る固より當然であらう。英國の今日あるは英國の労働者に忍耐性、勤勉性を有するものが多からたといはれるに徴するも、この問題の輕視すべからざるを知るであらう。

要するに以上の三要點を助長することによつて始めて個人の労働能率を増進し得るのであつて、これが爲めには自然教育、給與、労働時間の短縮等の問題を生ずる。

労働能率の問題と關聯して起つて來るのは廉價労働である。

國際間の生存競争、特に製造工業に於て廉價なる労働を得るものは頗る有利だと稱せらるゝ點である。

現に日本の紡績業が原料棉花を盡く外國に仰ぎ、又紡績機械も全然之を自ら供給し得ないにも拘らず、外國と對抗し得るのも一に労働賃銀が安いからだといはれ、また今日支那の工業が恐れられて居るのも労働賃銀が非常に廉價であるからである。

然しながらこれはよく／＼分析して見るに非んば俄かに其の得失を云爲し難い。即ち労働が眞に廉價なりや否やはこれを其の能率と比較して始めて決せらるべきもので、賃銀廉なりと雖も其の成績を擧ぐることが少なければ結局高價なる労働となるのである。而して賃銀の低廉であるといふことは往々にして生活の程度を低からしめるから自然能率も低下する傾向がある。蓋し労働能率は生活の程度と正比例するもので、生活の程

度は

一、生存の最低限度

二、文化生活を享樂し得る程度

とに分たれ、労働者にして其の受くるまことの賃銀が低きに失する時は生存の最低限度をも享受し得ない。況して前述の體力、知力、道徳力の發展の如きは思もよらないのであるが、賃金が最低生活費を償つて餘りある時はこれが多少文化方面の消費に當てられるから、自然人格も向上し、健康も保たれるといふことになるのである。

而してこの程度が高ければ高い程労働能率は高くなるのであるから、賃銀の安いといふことは無條件で賛成の出來兼ねる次第である。

又労働時間等も世界的標準は目下八時間であるが吾人の觀る所では日本人の體力では六時間を至當とするのである。而して充分各個人の修養と休養を與えなければ労働能率を擧げ得ることは不可能ではあるまらぬか。

△第二款 組織的労働能率

そも、現代の生産的活動は多くの場合に於て多數労働者の共力によつて始めて成立するものである。従つてこれを如何に組織し、又如何なる方法によつて運轉するかといふことは團體労働の擧ぐる能率と至大なる關係を有するのである。

例へばこゝに百人の労働者があるとして、これが個々別々に何等の統一もなければ何等の秩序も無く労働した場合と、一定の秩序一定の統一の下に作業した場合とを比較すれば、其の能率の相違の如きは識者を待つて始めて知るのでは無い、これ労働組織の問題を生ずる所以である。

労働組織に就ては從來種々の説がある。

獨逸系の學者にあつてはカールピユヒャーは共働労働、共通労働、労働結合、分業とし、シモラーは社會的職業分業、生産分業、分業等の語を使用して

居る。

然るに英國系の學者は分業と協力とに分つて居る。かくの如く名稱には種々あるも、之を要するに労働能率の増進に過ぎない。而してとりわけ重要だと認めらるゝのは分業である。アダムスミスが其の著富國論中に分業の説明を試て以來、分業は近代の生産組織に缺くべからざるものと認めらるゝに至つた。即ちアダムスミスは生産をして最も有效ならしむるには如何なる方法を探るべきかといふ見地から研究した結果、(一)時間を節約すること、(二)或る一部の仕事にのみ従事するが故に熟練を増すこと、(三)適材を適所に利用する利益あること、(四)發明を誘致する利益あること等の利益ありと爲して分業を擧ぐるに至つたのである。

蓋し分業とは生産活動を數個に區分して各労働者に其の一部分を分擔せしむるものである。尤も我國で分業といふのは社會的職業の相違までも分業といふのと、生産の意味でのそれと廣狹二様に使用されて居るが、

こゝにいふ分業は寧ろ後者の意味で、正確にいへば分勞といふのが當つて居るのである。従つて多數の労働者を使用する場合に最も必要である。然しながら分業は決して労働の分離を意味するものではなく、半面から言へば協同であるといはねばならぬのである。

今アダムスミスの擧げた項目によつて分業の利益を擧げて見ると

一、時間の節約

一人で全體の仕事に當るとすれば、其の順序として、第一の仕事を終れば第二の仕事に移り、かくして逐次全體の仕事に對する行程を追ふて行かねばならぬ。従つて異なる仕事に移る間には無用の時間を消費することが極めて多い。然るに分業となれば一人のする仕事は全體の仕事の僅かな部分に過ぎないから時間を空費する處は無い。

二、仕事に熟練する。

同じ仕事を幾回も繰返して行ふ時に其の労働が著しく熟練を増すのは

今更らふまでもない。従つて各個人の全體の仕事に對する能率は自ら増進する譯である。

三、適材を適所に置くことが出来る。

凡そ人には長短、能不能の別がある。若し全體の仕事を一個人で爲さうとする時は、一人で諸種の技能を備へて居るもので無ければならぬ。故に比較的簡易な仕事でも之を完全に成し遂ぐるといふことは困難である。然るに分業にあつては一種の仕事を能くさへすればそれで事足るのであるから、各人其の長所とするところに應じて仕事を分擔させる事が出来る。従つて各個人の長所を愈發揮せしめることが出来るのである。近代産業に婦人及幼少年の使用が殖へたのは實にこの邊に胚胎するものであらう。

四、發明を誘致する。

一人が同一の仕事を繰り返すといふことは種々の考察をめぐらさせる

結果となり、こゝに發明を生ずるのである。

以上四項の要件を綜合してアダムスミスは分業の利益を述べたのであるが、其の具體的立例として挙げた針の製造は有名なものである。是の如く分業は生産にとつて多大なる利益を存するものであるが一面に於て弊害が無いでもない。即ち

一、人間の興味が偏狭となり易い。

上述の如く分業では唯だ一部分の仕事を繰り返すに過ぎず。完成せる製品を作出する時に感ずる興味の全然皆無となるは勿論人間を一方に偏せしめ機械化せしめる虞れがある。

二、婦女及幼少年勞働を生ずる弊がある。

分業によれば各勞働者は一部の仕事に従事すれば可いのであるから、多くの場合に極めて容易である。従つてものによつては必ずしも成年男子を待つ必要なく、幼少年婦女子を使用しても足るので、企業家は賃金の

關係からこの種の労働者を使用するに傾き、其の結果は所謂婦人幼少年労働なる労働問題を惹起するのである。

○ 三、轉業困難となる。

分業によつて労働者の技能は或る一部の仕事にしか適せぬから、これが一朝失業することになると轉職が困難となる。

軍備縮少の結果多數の造船工、鐵工等が失業し、^{ある場合}居るが、これ等は何れも各部分の仕事にのみ熟練して居るのであるから、他の仕事を得るに困難して居るやうな次第である。従つてこれは労働問題發生の因となるものである。

たゞ夫れ分業は今日の生産組織にあつては如何にしても採用せなければならぬものであるからこの弊害を除くために^{△△△}社會教育等を盛にする必要がある。

第三款 科學的能率増進法

更に組織的労働能率に附加して論ずべきは最近勃興せる科學的能率増進法、一名化學的管理法 (Efficiency system or Scientific management) と稱するものでこれは本來は技術の方面から起つて來た問題で、經濟學の立場から見ると労働の能率問題に屬すべきものである。

この化學的能率増進法は米國のテローラー (Taylor) が最初に唱えた説で、テローラーズシステム (Taylor's system) とも言はれてゐるのであるが、

これは單に狭い意味の労働能率に限らず事務經營一般に應用せられてゐるのである。

この科學的能率増進法は未だ一般に經濟學の内部には這つてはをらぬが特に附言しやうと思ふ。

何んとなれば根本に於て經濟原則に出發點を置いてゐるからである。

而して應用の點に於て「疲勞の原則を實生活の上に應用し、人間の精力を出來る丈け浪費しない様にするのが其の方針である。

換言すれば凡ての點に於て科學的に正確な調査研究に基き人間の精力と疲勞との關係に付き適當な設備をなし勞を費すこと少なくして生産能率を上げしめるにあるのである。

第四款 勞働教育

これを個人的勞働能率増進の上から見るも、將た又組織的勞働能率の上から見るも、教育の極めて必要なることは略々推測し得る所で、寔に教育の程度は應て能率の程度を示すものといつて不可は無い。

而してこゝに教育といふのは一般教育は勿論、産業教育即ち技術教育をも含むのである。世には技術教育を受けた人の實績が教育を受けずに主として個人若くは工場等にて實習した人のそれに劣るを見て教育の無價値をいふ者もあるが、これは寧ろ教育の方法に缺陷があるのであつて、教育

それ自身を否定することは出來ない。

況や教育は常に勞働者に技術の熟練を與ふることに於て必要であるばかりで無く、勞働者の精神を向上せしめる上に大いなる効果を有するに於てをや。而してこの職業教育を組織的に早く行つたのは獨逸で、小學校卒業後補習教育制度により教育を施したといふ事を附言してをきたい。

第三節 勞働の供給

勞働者の過不足が國によつて各其の趣を異にすることは先に人口問題を述べた際にも言及した所であるが、我國の如き近年にあつて年々約七十萬の人口増加を見て居る。而してこの増加率を永く維持し得るか否かは聊か疑問で、現に昨今では幾分かづゝの増加率減退を傳へられるやうである。然し乍ら之を全體の數からいへば益々増加して居る状態であるから、勞働の不足を感ずることはあるまい、尤も或る種の勞働は一時不足したやう

なこともあつたが、これは時局關係の然らしめたもので、今後財界の不況に傾くに伴つて漸次平均されるものと思ふ。

之れに反して亞米利加合衆國の如きは天然の恩恵に比較して勞働力は著しく不足して居る。これ同國の勞働賃銀が比較的が高く、また海外移民の盛んに吸収される所以であるが、勞働者缺乏の結果としてこれが節約といふことも考慮され、其の局機械を以て之に代ふるに至り、かくて機械の發明使用の顯著なるを見るのである。

こゝで一つの問題の生ずるのは、かくの如く機械の發達が著しく、其の爲め勞働者を要することが少くなれば、勢ひ勞働者の職業を奪ふことになりはすまいかといふことである。

然し乍ら機械の増加は總て生産を大いに盛んならしめるから、假令個々の勞働には人を要せないことゝなるかも知れぬが、全體の生産としては多數の人を要するからそんな懸念はないのである。

要するに勞働者の供給は其の國に於ける生産事業の大きさに對する人口の多少によつて決するもので人口増加率の大なるは延いて勞働者供給率の大なるを語るものであるが、これを個々の勞働について見る時は職業の種類によつて勞働の過不足を來すことがある。この傾向は生産活動の旺盛な際に最も生じ易い。例へば工業の勃興するに伴つて農業勞働者の工業に走る結果、農業に従事するものゝ著しく減少するが如きこれである。而してかくの如き現象は目下我が國の味つて居る所で、所謂人口の都市集中問題なるものはこれである。

又これを國と國との關係からいへば人口過剩、従つて勞働者の供給が多い國ではこれを海外に移す必要を感じ、一方勞働者の不足に苦む國にかゝる移民を歓迎することゝなり、こゝに人口の移動、勞働者の移殖といふことが行はれるのである。支那、日本、伊太利の如きは前者に屬し、カナダ、濠洲、アメリカ諸國の如きは後者である。

第三章 土地（自然力）

第一節 土地の意義

前述の如く生産要件中第一に數ふべきものは勞働である。而して人間が勞働によつて外界の物を支配し、生産の効果を擧げる上に於て何んとしても缺く事の出來ぬものは自然力である。自然力と人力とが相對立して始めて經濟生活は成り立ち經濟生活の進歩發展が期し得られるのである。所謂文化の進歩とは人間が自然を支配する程度により計り知らるゝのはあるまゝか。貧富もこの關係の然らしむる所ではあるまいか。

然らば自然とは何ぞやといふに、觀察の方法によつてはあらゆるものを含有する。即ち氣候、風土の如き、若しくは風、水、土の如き、光線の如き、又自然に存在する動物、植物、礦物の如き所謂天産物をも盡く網羅することとなる

△

のであるが、實際經濟生活の對象となり自然の中樞をなすものは土地である。即ち之に勞働を施して或る種の收穫を期待し得るは土地である。尤も土地を全然他の自然現象と切離して見ることは出來ないのであるから、單に土地のみを生産の要素たる自然力となすは或は當を失するやも計られぬが、この事實は總て一面に於て、土地は總てのこれ等の自然現象、例へば土地に付帶して存する動植物、又は物理的、化學的の力、即ち瓦斯、石油等で、土地に就いて論ずれば、自然他のものをも説明することとなるのである。

生産上より觀て、土地と他の財物、即ち資本との異同に關して經濟上議論はあるもの、その程度の問題で決して本質的のものではない。即ち土地は自然に存在するものであり、従つて人力を以て破壊し得ざるものであるから資本とは違ふといふ觀念がリカード以來多く用ひられてゐる。供しながら土地は經濟上の意義に於てはその價値に在るのである。土地の價値は色々の關係から變化を來すので、従つて經濟上の土地の價値は人爲的

に破壊され得るのである。只だ土地が他の財物と異なる點は、同一の土地を自由に増す事が出来ず、又複製する事が不可能であるから、土地の價値は社會進歩に應じて他の財物と異なる傾向を呈する様になる道理である。即ち他の財物は社會進歩に従つて下落する傾向を有し、土地はこれと反對の現象を呈するのである。

而して生産要素としての土地について擧げねばならぬのは位置及地味である。

第二節 土地の位置 (Location)

土地を論ずるに當つて位置といふことは何故に必要であるか、土地と位置とは何れ程の關係を有するかといふことについて疑問を懐くものは試みに土地に關する或る一個の事實をとつて考へて見ればよい。同じく農業土地であつても暫く地味といふことを別にして單に位置といふことから

Location

調べて見ると、東京郊外の土地はそれよりも遠く離れた千葉、埼玉あたりの土地よりも地價がズット高い。

又日本橋の土地は坪二千圓もするが市外の戸塚あたりの土地は一坪せいふ、百圓内外であらう。即ち位置の相違は同じ一坪の土地の價値にこれだけの相違を來たすのである。

今この事實を經濟上から説明するならば、土地の重要さはこれを交換の方面から見ると消費の中心地に對し最も近く、又最も便利たること、又これを生産の方面から見れば、生産に對する原料を容易に收得し、又労働者を便宜に使用し得るといふことによつて決するといつてもよからう。

尤もこゝにいふ遠い近いといふのは必ずしも地理學上にいふ遠近では無く、交通から見た遠近である。鐵道線や電車線が引込まれた爲め忽ち地價の暴騰を來すといふのも地理上の距離には變りはないが、交通上から見た距離が短縮せらるゝ結果に外ならない。

以上の具體的實例によつて略々位置の閉却し得ぬ理由は判明したであらうが、更に煩を厭はずに説明すれば、農業地から農産物を中央の市場に向けて輸送する場合を考ふるに、若し數日を要するとすれば、其の間に品物の品質は幾分低下するを免れざるべく、又中には腐敗するものも無いとも限らぬ。假にさうした心配が無いとしてもこの間に要する運賃は僅か數時間にして輸送し得るものに比して遙かに高からざるを得ない。都會の土地も亦これと同一の理由を以て説明し得るのである。

第三節 地味

土地の重要さを決定する上に於て地味といふことが其の主なる要素を占めてをることは今更ら説明するまでも無い話で、同じく一反歩の土地でも地味の如何によつては同一能率の労働者を使用し、同一量の肥料を投じて、然も收穫になると、これは數石の收入あるに彼は僅か一石の收入すら無

いといふことがある、といふやうな譯である。

而して地味の問題は種々に解釋し得るのであつて、これを大別して自然的地味及人工的地味とする。又地味を利用するに當つては平面の地味と地下の地味とを區別する必要がある。

平面の地味とは農産、林産等に應用するものをいひ、地下の地味とは礦物の存在を意味するのである。而して平面の地味は人工を加へて之を變化せしめることが出来る。即ち施肥、灌漑等によつて惡い地味を良き地味に變へることが出来るのであるが、地下の地味に至つては之を加何ともすることが出来ない。又平面の地味でも土地夫れ自身は種々の方法で改良せられるが、他の方面即ち風土、氣候等によつて或る種の作物は栽培し得ぬといふやうに制限せられることが多い。

以上地味の問題は更に分配の問題に關係を持つのであつて、即ち土地から生ずる地代の内容を見る場合に純粹の地代と他に資本として投じたも

のに對する報酬に就いて分配の問題と重要な關係を持つのである。

第四節 土地の利用

生産と土地との關係について主要なる點は前述の位置及地味の二項目であるが、續いて起るのはこれを如何に利用するかといふ問題である。

そも／＼土地の利用は生産に於けるそれと、住宅に於けるそれとに分けられる。即ち牧畜、農業、山林、狩獵、漁業、并に採礦等の財物生産に關する方面と、普通個人の住宅とである。同じく建築物であつてもこれを工業上に利用する場合には生産上の利用といはねばならず、又各個人の住宅の場合でもこれを以て貸家業を營んで家賃を收得するに於てはまた生産上の利用といはなければならぬ。

従つて以上の二區別は其の限界が甚だ分明では無いのであるが、假りにかうした方が便利である。

土地を生産に利用する主なるものは農業である。故にこの方面について觀察すれば自ら他の方面をも類推し得るのである。

而して農業に對する利用てふことについて深い考察を下すとすれば勢農業技術に渡らねばならぬから、こゝでは簡單に説明して置く。そも／＼今日に於ける農業は疎耕農法 (Intensive cultivation) と密耕農法 (Extensive cultivation) とに分れて居る。

前者は新開地地方の如き土地の割合に人口の少い所に行はれて居る方法で、その目的とするところは出來得る限り大なる土地を使用して、出來得る限り大なる收穫を得やうとするにある。然るに後者は比較的小なる面積に對して資本と勞力とを投じて多くの收穫を得ようといふのである。我國の如き人口の稠密なる土地にあつては北海道を除くの外皆密耕農法を奉じて居る。これに反して米國の如く廣漠なる土地の存在して居る所では疎耕農法の行はれて居るのを見るのである。

畢竟するに土地の多い場合には疎耕主義を有利とし、土地の割合に人口の多いときは密耕法を有利とするのであつて、其の得失は一概に之を律するを得ない。而してこの法則は種々のものに演繹することが出来る。例へば消費の中心地と各種の農作地との配置の關係の如きである。今人口或は人の消費を中心として考へれば、近い所には密耕法が行はれ、遠い所には疎耕法が行はれる。

其の適例としてアメリカ合衆國を舉ぐれば、同國は前述の如く疎耕農法の行はれて居る所であるが、近頃は都會近傍には密耕法が行はれて居る。

翻つてこれを機械の應用についていへば、密耕法には機械力を應用し難く、疎耕農法には機械の應用が自由である。また住宅用の場合にも密住法 (Intensive housing) と疎住法 (Extensive housing) との區別があり、一般に疎住法から密住法に移る傾向が著しいことを記憶する必要がある。

最後に注意すべきは農産物と社會進歩との關係及地價と社會進歩との

關係である。

社會進歩とは色々の内容を有するが、その内容の一つは人口の増加であり、人口の増加は土地の需要の増加を意味するのである。その結果は食料の價格の騰貴となり、即ち他の事情を別として考ふれば、農産物の價格は社會進歩に従つて次第に騰貴する傾向を有するのである。この點が工業上の生産物と正反對なのである。工業上の生産物は社會進歩の結果は技術が應用せられ、従つて大量生産が發達し、供給の増加を來し、價格は自然の結果として低落の傾向を示すのである。

之に反し土地が多々益々利用され、その結果需要が増加すれば地代が騰貴し、従つて地價も騰貴を免れぬ事になるのである。

第五節 報酬漸減の法則 (Law of diminishing returns)

土地の面積と人口との割合によつて農業の方法が疎耕から密耕に移る

Law of diminishing utility
Law of ——— returns

といふことは、總て一面に於て一定の土地の利用による収益は之に投ずる
勞働及資本の増加に比例して漸次増加するものであるといふことを語る
ものである。即ちこゝに一反歩の土地があるとする。これを一回耕した
と、二回耕したとではその收穫に相違があり、又肥料を全然投せぬのと投じ
たのとでは收穫に差別あるは何人も直ちに首肯するであらう。然しなが
らこれも程度問題で、勞力及資本を投ずることが既に一定の限度に到達す
る時はそれ以上如何に勞力及資本を投ずるも、其の割合に收穫は増加せぬ
のである。これを經濟學上では土地報酬漸減の法則若くは收穫遞減の法
則といふのであつて、第一編に於て述べたる效用漸減の法則と相呼應する
ものである。寔にこの法則が行はるればこそ土地に對する人口の過剩若
くは不足の問題も生ずるのであつて、若しこの法則が行はれぬものとせば
人は皆優等な地のみを利用して劣等なる地は棄て、顧みぬのであらう。
次に問題となるのは、從來この法則は農業上にのみ行はれて工業に行は

4

るゝものでは無い、否寧ろ漸増の法則が行はるとせられたのであるが、今日
ではこの法則は工業にも適用せらるゝといふ説の生じたことである。成
る程工業にあつては勞力及資本を増せば、其の報酬は次第に増加するもの
で、これが限界は殆んど無いやうである。然し乍ら土地にしても一定の面
積といふ條件を限らなければ勞力及資本を投ずるに従つて永遠に收穫は
増加するものといひ得べく、反對に工業も一定の面積を限るときは之れに
投すべき勞力及び資本にも一定の限界が生ずるであらう。
故に或る意味に於ては漸減の法則が行はれるといへるのである。唯だ
其の程度が工業の方が遅いのであらう。
是の如く土地の利用に對しては報酬漸減の法則があつて之を支配する
結果、社會の進歩發達を來し、人口の増加するに伴れ農産物はいよゝ騰貴
し、其の局次第に劣等な土地が使用せらるゝので地價もまた騰貴すること
となる。こゝに於てか土地の収益増加税の問題も生じて來るのである。

リカードは地代に關する研究にて、土地は他の財物と異つて破壊せらるゝものではないといつたが、それは單に土地の位置にのみ應用すべきもので土地の價値は常に破壊せられて居るのである。

Capital

4 4

第四章 資本 (Capital)

第一節 資本の本質及其種類

現在の經濟組織が資本主義の經濟であるといはれ、或る方面から常に非難の的にせられて居るといふことは聽て資本といふものゝ今日の經濟組織にとつて如何に重要なかを物語るものであらう。固より經濟の主體は人間であるから、勞働が生産の主要素であることは屢々述べ來つた通りであるが、勞働の對象として今日の生産上は重要な地位を占むるものは資本である。

然らば資本とは何であるか、資本の本質は如何。

由來資本の定義については幾多の學説があるが、これを一々列擧するは其の繁に堪えざるを覺ゆるが故に、こゝには一切を省略して比較的合理的